

## 私と音楽

### —今なぜ平家琵琶なのか、自伝的考察—

川瀬 健一

#### はじめに

私の日々の生活の中で、大きな割合を占めているのが音楽である。

その大部分を占めるのが平家琵琶の稽古。

2003（平成一五）年春以来、週に一度所沢の先生の御宅に通って稽古をつけて頂き、翌日から次の稽古の日までの間には週に三日ほど、各一時間程度は、先生のお教えを思い出しながら、習った句（平家琵琶では曲と言わずに句と言う）をじっくり稽古し、次の稽古日が近づくと、次回稽古をつけて頂く自分を分なりに語ってみる。この繰り返しをすでに、十年ほど続けている（途中三年ほど稽古に通えなかったので、稽古をつけて頂いたのは、丸九年である）。

平家琵琶とは何か。

私が習っているのは、正しくは前田流平家詞曲。鎌倉時代の初めに成立して八百年以上続く、多くの日本の伝統芸能の祖源となった古典音楽である。音楽とは言っても歌うのではなく、平家物語本文そのものに節をつけて語る。語りものの芸能であるが、その節にはいくつかのバリエーションがあり、西洋音楽的に言い表せば、語りの途中でどんどん転調していくので、音をとるための楽器として琵琶を使う。ただし琵琶を弾く場面は主として、節と節の間で、次に語る曲節の音階を確認するために、その音階で出来た琵琶の手を弾いたり、次の節の出だしの音を弾いて音程を確認したりするためである。したがって近代になって成立した薩摩琵琶や筑前琵琶のように、琵琶が主役になってお話しの際の臨場感や感情を盛り上げたりするために活躍することはない。

注…平家琵琶は途中で一方流と八坂流という流派に分かれたが、早くに八坂流は滅び、この流派の流儀で語る「訪月」という句が、一方流に一句だけ伝えられている。その一方流も途中から、前田流と波多野流に分かれ、先の大戦後まで京都に波多野流を伝える人が残っていたが今は絶え、現在残っているのは前田流だけである。

この音楽の歴史は、吉田兼好が記した『徒然草』によれば、後鳥羽院の時代、つまり後鳥羽天皇が位を譲って院として政務をとった時代に、比叡山延暦寺の座主であった慈鎮和尚が、信濃の前司藤原行長に作らせた物語に節をつけて、盲目の琵琶法師生仏に語らせたのが始まりであったという。以後平家琵琶は、貴族や上級武士に好まれて発展し、平家琵琶を語る盲目の法師らからなる座組織（当道座）も成立し、本所と仰ぐ貴族の保護をえて、平家物語を語る特権を持って発展していった。その中で現在の平家琵琶の語りを定め、語る詞章を定めたのが、室町時代初期の検校（本来は、僧侶の階級で寺務を総括する僧侶の官職名だが、当道座の最高位を占め、座組織を統括する盲目の琵琶法師をこう呼ぶ）であった覚一検校だった。そして彼が確定した平家物語の詞章の一本を、当時新たに源氏長者となつて、当道座を保護する本所ともなつた將軍足利義満に献上した。この一本がその後さまざまに筆写されて世に出て、江戸時代になつて活字や版木で版本として流布した。これが今でも一般に読まれている覚一本平家物

語である。吉田兼好は、足利將軍家が源氏長者となる以前に源氏長者であり、当道座の本所であつた村上源氏の久我氏の執事であつた下級貴族で、その後当道座を保護した足利將軍家とも親しい者なので、彼が記した『徒然草』が伝える平家琵琶の始まりに関する記述は、歴史的事実を反映したものと思われる。

また平家琵琶が最も良く聴かれ繁栄したのは、室町時代の南北朝期である。室町幕府と南朝方勢力の争いの中で翻弄され、何度も南朝方に拉致されて京都から吉野に移されて虜囚の憂き目をみた北朝天皇家とその分家である伏見宮家では、しばしばその邸宅に検校や勾当（これも本来は、寺院で事務を取る最高位の官職である別当の次に位置する僧侶の官職名だが、当道座の検校の次に位置する高位の琵琶法師の役職名となつた）などの高位の位を持つ琵琶法師が招かれ平家琵琶が聴かれていたことは、当時の史料、伏見宮貞成親王の『看聞日記』でも確認できる。

注…ちなみに平家琵琶の句全二百を語れるのは、検校やそして勾当の位を持つ琵琶法師だけで、その下に位置する座頭という位の琵琶法師は、その一部を語る力しかなかった。絵巻物などで袴をはいて御供の者に琵琶を持たせたり自身の背に背負つたりしている琵琶法師が登場するが、その多くは座頭である。検校や勾当という高位の身分の琵琶法師が絵巻物に描かれることはほとんどなく、一部の特注品の屏風に限られ

ていた。さらに絵巻物にみすばらしい姿で街を歩く姿を描かれた琵琶法師は、平家琵琶を語る琵琶法師ではなく、地神経などを語る盲僧である。

応仁の乱以後は室町幕府が衰微し、諸国の大名が、互いに覇を競う戦国期に入ると、当道座の上級の琵琶法師たちも諸国の大名の元に赴き、その庇護をうけて演奏活動を続けるようになった。平家琵琶を大変好んだ武将としては、越後の上杉謙信が有名である。また平家琵琶はこの時代に、京周辺で始まった芸能の一つである茶の湯とも結びつき、茶人が主催し、京周辺の貴族や有力町人の参会する茶会において平家琵琶が演奏されるようになった。茶の湯の大成者である千利休も平家琵琶の愛好者・語り手として伝えられている。

豊臣秀吉と徳川家康による天下泰平の世が実現すると、平家琵琶は、統一権力によって武士の式楽として保護され、当道座の検校や勾当や座頭などの琵琶法師たちは、將軍家や大名家の扶持を得て、彼らの家の法要などにおいて平家琵琶を演奏するようになり、大名の中にも平家琵琶を嗜み、中には免許皆伝に至る者も出て来た。そして前時代に続き茶の湯と平家琵琶との結び付きも続き、大名や上層町人の主催する茶会ではしばしば平家琵琶が演奏され、高名な茶人にも平家琵琶の愛好者・語り手が出ていた。

もともと將軍や大名による扶持を得て、彼らの家の法要などで演奏していたのは、高位の琵琶法師たちだけである。よ

り下位の琵琶法師たちの正業は、幕府から当道座の特権として認められた、鍼灸の医業と、江戸時代になって庶民にも流行った琴や三味線などの教授であった。

しかもこの時代において、琵琶を伴奏楽器として様々な物語を語る盲目の法師は、当道座に属する琵琶法師だけではなかった。おそらくは平家琵琶の始まり以前にその淵源を持つ盲僧琵琶がこの時代にも存在し、彼らはその正業としては、建物を建てる際の地鎮祭に際して、琵琶を奏でながら地神経を語ったり、さまざまな物語を語っていた。この盲僧琵琶の盲僧たちもまた平家物語を語ったり、平家琵琶法師が正業としている三味線にも参入しようとしていた。こうした對抗勢力を圧殺するために当道座は、保護を受ける幕府を動かして、平家物語を語れるのは当道座の琵琶法師だけであるとし、さらに可動式の柱を有して様々な音律で演奏可能な平家琵琶を使用できるのも当道座だけとし、当道座に属さない他の琵琶盲僧には三味線の使用を禁止するとともに、柱が固定されて音律の変更ができない琵琶のみの使用を強制するなどの措置を取った。こうした当道座の圧力の中で、平家琵琶を固定式の柱とし、さらに三味線の要素を取り入れたものに改造して、三味線音楽的な派手な要素を取り入れた琵琶楽として新たに発展したのが、薩摩琵琶であったが、これは江戸時代に於いては、九州の薩摩地方に限定されたものであった。

明治維新と廃藩置県によって、幕府と大名家が消滅したことで平家琵琶法師の当道座はその保護を失い、彼ら琵琶法師

の多くは平家琵琶を棄て、正業である鍼灸の医業と琴や三味線の教授へと転業していった。こうして平家琵琶法師は消滅したが、一方で東京では、茶人や武士などの教養人の中に平家琵琶を語る者もわずかにいた。この人々の中には、なんとか平家琵琶を保存しようとして自ら元琵琶法師に学んだり、平家琵琶を学ぶ場を設けたり、元琵琶法師を招聘して演奏会を度々開いたりと努力したが、江戸時代において一般人に馴染みがなかった平家琵琶は分厚い聴衆をもたず、彼らの中から平家琵琶を伝承する人は絶えて行った。

現在唯一平家琵琶を伝承するのは、弘前の津軽藩の武士で藩主の命によって平家琵琶を伝承していた楠美家の流れを引く館山甲午の弟子筋だけである。私の師匠新井泰子は、館山甲午の弟子・橋本敏江に教えを受け、甲午の子息館山宣昭に免許皆伝を得て、演奏活動と弟子の養成に取り組んでいる。現在この館山甲午の流れを汲み、平家琵琶全二百句を伝承する免許皆伝者（相伝者ともよぶ）は、全国各地でそれぞれ演奏会を開いており、昨年私の姉弟子である内田亜希が、十人目の免許皆伝者となった。

注…この館山甲午の流れを引く平家琵琶奏者以外に、平家琵琶を正しく伝承している人としては、名古屋の今井検校がおられる。しかしここには八句しか伝わっていない。これ以外に、世の中には平家琵琶奏者を自称する人は数多いが全て偽物。その一つは、館山甲午を見出した一人で、国語学者の故

金田一春彦の流れ。彼は中世日本語の音韻を研究する過程で平家琵琶に出会い、館山甲午から数句を習った。だが突然、先生は語りを変えたと館山甲午を非難し、自分だけが江戸時代以来の平家琵琶を正しく伝えると公言し、薩摩琵琶奏者数人にこれを伝えてしまった。そしてこの流れの人たちが我こそ正しい平家琵琶と自称して各地で演奏している。この人々は金田一が館山から習った句がわずかであったため、多くの曲節の正しい語り方を知らない。特に規範楽譜である『平家正節（まぶし）』に明示されていない節回しはまったくわからない。なぜならこれは、師匠から口移しで教わるから。仕方がないのでこの人々は、相伝者のCDを聴いてこれをまねしたが、聴いただけで分かるほど単純な節回しではないので、今でも出来ないでいる。この流れ以外に、薩摩琵琶奏者や筑前琵琶奏者が、平家物語を題材に作詞作曲して琵琶歌を作って演奏する際に、自ら平家琵琶と名乗る場合と、その公演を企画運営する側が平家琵琶と自称する場合がある。その他、相伝者から少しばかり習っただけで免許皆伝を受けてもいないのに、平家琵琶奏者を名乗って、カルチャーセンターなどで教えている者もいる。偽物が流行っているわけだ。

すっかり横道に逸れて、平家琵琶の歴史になってしまったが、2003（平成一五）年の春以来、私の日々の生活にあって、平家琵琶はなくてはならない物となり、私も将来免許皆伝者となることを目指し、稽古に励む日々である。

この平家琵琶以外にも、私の生活には音楽は不可欠の要素である。

今こうやってパソコンに向かって文を書いている書齋には、中学校教員になって十年ほどたって、初めて自分の稼いだ金で購入した、DENON製の大きなステレオが部屋の真ん中に鎮座している。そしてその傍らには、中学生以来収集したLPレコードが約四百枚、そしてCDが約二百枚。そのほとんどが、いわゆるクラシック音楽である。音楽を大音量のステレオで聴きたい時には、書齋でじっくり聴く。そして今や第二の書齋と化してしまっている応接間でいろいろな本を読むときには、応接間の大きなテレビの上に設置した小型のステレオにCDを入れて、バックグラウンドミュージックとしている。さらに我が家のこの応接間と玄関フロアーを使って、趣味の花の写真の展示会を開いているときも、応接間の小型ステレオは、バックグラウンドミュージックとして、サティやショパンなどのピアノ曲を奏でている。

なぜこれほど私の生活において音楽が大きな割合を占めるようになったのか。

### クラシック音楽との出会い

幼稚園・小学校での生活においても、音楽はあつたはずである。特に小学校は教科に音楽があるわけだし、最初に入學した横浜市の小学校では縦笛を持たされ、すぐに転校したさ

きの三重県の小学校ではハーモニカを持たされた。なぜか東と西の小学校の音楽の授業で使用した楽器が異なったのだが、小学校時代には、音楽に関して大した記憶はない。

私がクラシック音楽にのめり込むようになったのは、中学校に入ってからのことである。

1962（昭和三七）年の4月に川崎市立稲田中学校に入學した。ここで音楽の担当であった量先生との出会いがなかったら、私の生活がこれほど音楽漬けとはならなかったことであろう。量先生の音楽の授業は、とても厳しいものであった。合唱のための発声練習や和音などを聞き取る聴音の訓練。そして今まで習ったことのない音楽理論の講義など。でもなぜか楽しかったことを覚えている。そして量先生のおかげで、現在の私は、特に音楽を専門的に勉強したわけではないのに、五線譜を読むこともできるし、音程を空で取ることもできる。特に一年生となつての初めての夏休み。その夏休みの音楽の課題が、十曲以上、音楽の副読本に載っているクラシック音楽を聴いて、その感想文を書くことだった。その副読本とこの曲の西洋音楽史の教科書も兼ねており、歴史上の名曲をたくさん紹介し、その作曲家の簡単な説明とともに、その曲の主な旋律を五線譜で示し、音楽鑑賞に資するように作つたものであった。

しかし、当時の我が家にはステレオはなく、家のラジオで音楽を聴く習慣はなかった。仕方がないので、父にねだつてFM放送用のラジオチューナーを買ってもらい、これを家の

ラジオにつないで、新聞の放送欄にクラシック音楽放送がある時間を見つけては、毎日その音楽に耳を傾けた。一月半ほどの夏休みの間に、なんと聴いて感想文を書いたクラシック音楽は、百曲は越えてしまったと記憶している。これですっかりクラシック音楽の虜になったのだ。

そこでさらに父にねだって、ステレオを買ってもらった。父の勤めていた総合電機メーカーが初めて出した家庭用のステレオ。SP版とLP版の両方が聴ける。そしてこの際父が、会社の倉庫から、売れずに残っていたクラシックレコードを多数もらってきてくれた。父が勤めていた総合電機メーカーには、音楽部門もあったからだ。

この時父が会社の倉庫から持ってきたレコードの中に、何枚かのクラシックレコードが入っていた。他にはムード音楽と、ジャズなどがあつたが、私はこれらには見向きもせず、クラシックばかり聴いていた。あとで知ったことだが、父が選んだものはなんと名曲ばかりであつた。しかもマニアとも言えるクラシックファンではないと聴かないし、めったに演奏されることもない名曲までも含んでいたのである。このクラシックレコードとの出会いも、さらに私をクラシック音楽に引き込んでいった。

この時のレコードの曲名を列記してみよう。

#### 1 交響曲第二番ニ長調作品36

コロオラン序曲作品62

プロメトイスの創造物序曲

すべてベートベン作曲。演奏は、クレンペラー指揮フィルハーモニア管弦楽団。

#### 2 ヴァイオリンソナタ第九番イ長調クロイツェル

ヴァイオリンソナタ第八番ト長調

どちらもベートベン作曲。ヴァイオリン演奏は、ナタシ・ミルシテン。

#### 3 ピアノワルツ第一番から一四番

すべてショパン作曲。演奏はサンソン・フランソワ。

#### 4 マンフレッド交響曲

チャイコフスキー作曲。演奏は、シルベストリ指揮フランス国立管弦楽団。

#### 5 交響詩「ルオンノタール」

交響詩「古譚」

交響詩「夜の騎行と日の出」

交響詩「波の娘」

すべてシベリウス作曲。演奏は、ドラティ指揮ロンドン交響楽団。

#### 6 交響曲第五番変ホ長調作品82

交響曲第七番ハ長調作品105

どちらもシベリウス作曲。演奏は、バルビローリ指揮ハルレ管弦楽団。

これが、父が会社の倉庫からもらってきてくれたLP版レコードの中のクラシック曲の全てである。全て父の勤めていた総合電機メーカーの音楽部門が提携していたエンジェルレ

ーベルのもの。この中でかわっているのが4・5・6のレコード。特に4番の曲は、チャイコフスキー自身が自分の生涯の大傑作と呼んだ交響曲なのだが、大編成オーケストラと合唱団とパイオルガンが必要な曲で、しかも演奏時間が一時間を越える超大作。ためにこの曲の前後の交響曲である五番と六番悲愴が有名で人気があるのに反して、この曲はめつたに演奏もされず、マニアしか存在を知らない。曲はイギリスの詩人バイロンの劇詩をもとにしたもので、これは、バイロンと彼の異母姉との間の近親相姦とも言える恋愛関係とこれに対するバイロンの罪悪感を元にして書かれたもので、その主人公の名がマンフレッドなのだ。登場人物それぞれにその人物の性格を表した特徴的な旋律が付けられ、各自の旋律が劇のように絡み合いながら織りなす交響楽曲で、交響曲と銘打っているが、実態は交響詩か楽劇と呼んだ方が適当な曲である。しかも曲の最後の地獄の王との取引で死ぬことも許されなくなつて現世で苦悩の中で放浪する主人公マンフレッドが、亡き恋人の亡霊によって不死の呪縛を解かれて天上へと旅立っていくと言う場面。ここに使われた曲が、古代ローマの讃歌「怒りの日」という曲で、これを最初にパイオルガンが荘重に奏で、さらにこの旋律をオーケストラが追いかけて終わるといふ劇的な曲である。しかしこれは名版だが、残念ながらモノラル録音。また5・6のレコードは、北欧の大作曲家シベリウスの曲だが、これらもまた作曲者が一押しの名作なのに、あまり知られない曲である。さらに1番のレ

コードも有名なベートベンの曲とは言え、比較的初期の作品で、これもあまり演奏されない名曲である。2は有名なベートベンのヴァイオリンソナタ集。そして3はショパンのワルツ集。このレコードはなんと試聴版でレーベルが貼ってないものであった。

これらの名曲に浸れたことが、さらに私がクラシック音楽にのめり込むきっかけになり、音楽を聴くことを通じて西洋音楽史を学び、西洋近代史を学ぶことにも繋がったのだが、ほとんど音楽を聴かない父に、曲の良し悪しが分かるわけがない。どういう基準で選んだのかと後に尋ねたら、父の答えは驚くべきものだった。レコードジャケットが美しいものだけを選んだと。

こうしてステレオとLPレコードを手に入れ、家では常にラジオのクラシック放送とともに、音楽を聴く毎日となったのだが、まだ中学生時代には、自分自身で音楽を奏でるのは、一年の中の限られた時期だけのことであった。それは秋の文化祭が近づくと、普段は書道部で活動している私に、音楽の量先生から声がかかり、合唱団とリード合奏団に誘われて、文化祭での演奏に備えて、放課後毎日練習する日々となる時期だけのことだった。

ただ中学生時代には、音楽に関して一つの夢を持っていた。それは将来、自分自身が演奏家になるか作曲家になるというものであった。しかしこれは、父母の一言で淡くも潰えた。「そんなお金のかかることを習わせてやるお金が我が家にあ

るか？」だった。これを聴いて納得。この夢はあきらめざるを得なかった。すぐさま納得した理由は、母方の従兄で音大を出て、すでにピアニスト兼作曲家として活動している者がいたからだ。彼の家は我が家とは異なって裕福で、子供のころからピアノを習って音大に入り作曲を勉強。そこを卒業してからもなかなか売れない彼のために、彼の家族はなんども自費で演奏会を開き、そのチケットをばら撒いていた。その演奏会の一つに、我が家も駆り出されたことが、何度かあったからだ。彼の父親は、著名なフィルムメーカーの副社長。このメーカーが映画用のカラーフィルムを開発するに際して、京都大学工学部を出たばかりの彼をわざわざ自社に招いて、開発のための技術者とし、彼は見事その期待に応え、日本初の映画用カラーフィルムを作ったのだった。この家には幼い時から何度となく遊びに行っていた。広い芝生の敷き詰められた大きな庭をもつ邸宅で、この庭で従兄たちによく遊んでもらったものであったが、狭い我が家に比して馬鹿でかい豪邸に住める家だから、あれほど音楽にお金をかけられるのだと感じていたからであった。そして同じくこの頃もう一つ抱いていた夢、将来画家になるという夢も、同じ理由で諦めた。ただ一つ、現実味を持って抱き続けた夢は、歴史家になって大学で研究と教育に明け暮れることだった。

### 音楽を奏でる毎日―高校時代

私が日々音楽を自ら奏でるようになったのは、県立川崎高校に入学し、音楽部弦楽合奏班に入ってからのことである。1965（昭和四〇）年4月に高校に入学してしばらく経った頃、部活動を決めるために校内を歩きまわって幾つか部を見学した。この時入部しようと心に決めていたのは、美術部であった。

実は中学校時代、部活動として第一希望で出したのは、美術部だった。子供の時から手先が器用だった私が一番好きなことは、絵を描くことだった。自慢ではないが、幼稚園の時にも、そして小学校時代にも、私の絵がいくつかコンクールで入賞したこともあった。特に誰かに描き方を教わったわけではない。ほとんど自己流ではあった。だが小学校のクラブ活動には美術はなく、模型クラブだけだったので、そこでペーパークラフトをやっていた、だから中学校で部活動という物があることを知った時、第一に入りたかったのは美術部だった。だが希望者が殺到した時には別の部に移らざるをえず、第二希望には、小学校二年生の時から習ってきた書道にしようと考え、部活希望票には、第一希望美術部、第二希望書道部と書いて提出した。そして部活決定の日、担任教師から私に言われたことは、「第二希望になったよ」というものだった。ちよつとがっかりしたが、まあ好きなことなので、文句も言わず書道部の活動に加わり、それから三年間、卒業するまで書道部で活動し、三年時には部長、そして川崎市の書道展で「奨励賞」という上位入選したこともあった。この時表彰の



ために川崎市立体育館を訪れて知ったことだが、私以外の入賞者は、ほとんどみな市内でも有名な幾つかの書道塾に属していた。

私自身は、三重県朝日町の、父の会社の社宅に住んでいた時、近所に住んでいた社員の一人が書道の先生で、社宅の子供たちが多数そこに通っていた。母に行ってみるかと言われて入ったわけだが、ここには小学二年生の初めから、小学六年生の夏休みに横浜の学校に転校するまで、週に何日も放課後通ったものであった。しかし横浜でも、そして川崎に移って中学に入ってから、書道塾に通うことはなかった。中学では一年時の書道の時間と部活の書道では、技術家庭科担当の三浦先生に書道を習ったが、三浦先生が私の書に注文をつけることはほとんどなく、私は一人でどんどん手本を見て書く日々であった。三重県朝日町で私に書道を教えてくれた先生がいつも厳しく言っておられたことは、「手本を良く見よ。見て、筆の運びや速さを自分の頭で考えよ。考えてそれを試してみよ。それで手本と自分が書いたものを見比べて、自分が書いたもののどこが手本と違うかを見つめよ。見つければ、手本と異なった理由を考えよ。筆の運びや速さを。そして原因と思われることを見つけたら、また試してみよ。これを何度でも繰り返し返し、手本と同じ文字が書けるように修練せよ」だった。そしてこの方法で私が書いたものを、先生は眼の前で、朱筆で添削してくれた。

後に中学校教員になってから、成り手がいないからという

理由で数年間一年生に書道を教えることとなったさい、もう一度勉強しようと思って、通信教育の書道講座を受講した。この際のテキストを見て、三重県での小学生時代の書道の先生の教えは、臨書という、書道のもっとも基本とする学び方であったことを知った。適当な教師はしばしば、手本を半紙の下に入れて、その上から筆でなぞる方法をやらせてしまう。しかしこれを繰り返ししていると、手本と寸分違わぬ形にすることだけに心が行ってしまい、その結果筆の運びの勢いが殺がれ、書きあがった書に力がなくなってしまうのだと、通信講座のテキストには書かれてあった。得難い師匠に出会ったものなどは、後で思ったことである。

先生は臨書を勧めるとともに、しばしば生徒の筆を握っている手をとって、先生の筆の運びと速さで、手本の字を書いてくださった。お陰で、筆の運びや力の入れ方や抜き方、そして筆の速さの遅速。こうした書道の基本を体感できたのだ。

幼い日々先生に習ったこの方法は、中学一年生に書道を教えた際に、私も実践した。社会科教師の私が書道を教えるわけだから、生徒の中の書道塾に通っている生徒たちは、最初は私を馬鹿にする。しかし私が手本の文字を試しに書いて見ると彼らは驚嘆し、そのうちに私が彼らの手をとって運筆を体感させると、この驚嘆はさらに深まる。「塾の先生の教え方とすごく違う」と。そう。塾の講師の多くは、手本を文字通り写させていたのだ。臨書と言うもつとも手間のかかる、しかし書を学ぶための近道を避けて、安易な方法を取っている。

昔小学校時代に教えを受けただけであとは自己流でやっていて私で、しかもすでに高校・大学時代は書から離れて、さらに教員になってからも書道とは縁遠かったので、およそ二十年ほど書道から離れていた。しかし、通信講座の段位でいうと、最高が九段とすれば、五・六段の実力は当時でもあった。これも幼い日の先生の薫陶の賜物である。

またちよつとわき道に逸れたが、実は中学一年の時、私が入ることに決まっていたのは、第一希望の美術部だったのだ。このことを知ったのは、卒業式の少し前のこと。美術部顧問で三年間美術を教えて頂いた先生に、「ところで川瀬は、なんと三年間美術部に来なかったのだ？」と尋ねられた。「えっ」と思い詳しく聞いてみてわかったのだ。なんと一年時の担任が伝え間違ったのだ。しかも本来入るはずのない書道部に現れた私に、顧問の三浦先生は何も言わず、この結果私は書道部で三年間活動してきたのだ。

こんな事情があったので、高校に入ったら美術部に入って、思う存分絵を描こうと心に決めていた。

そこで高校の校舎から少し離れた場所に音楽室と美術室とが一緒になった芸術棟という建物があるので、そこに向かって、建物の玄関フロアーから右に行けば美術部なので、そこに向かおうとした。ところが左手からなんと、ヴァイオリンなどの弦楽器の音が聞こえて来た。フラフラつとそちらに引き寄せられていくと、ヴァイオリンを手にした上級生が入ったばかりの一年生数名にヴァイオリンを教えていた。ぼー

っとして見てみると、私に上級生が、「君もやってみるか」と聞いてきた。「まったくの初心者でも弾けるようになりますよ」とか」と聞くと、「もちろん。ちゃんと弾けるようになるよ」との答えが返ってきた。なんとそこで迷うことなくそのまま、音楽部弦楽合奏班に入部し、その日からヴァイオリンを弾く毎日となったのだ。この時私に声を掛けてくれたのは、当時の弦楽合奏班のチーフで音楽部副部長のF先輩だ。彼は子供の時からヴァイオリンを習ってきたそう。

父母の一言で諦めた、演奏家になるという夢。レコードやFM放送でクラシック音楽を聴きながら、この夢はまだ私の心の中で生きていたのだ。この夢に少しでも近づける。おそらくこの想いが、私を動かしたのであろう。選択科目も美術ではなく音楽を選択したので、この日から絵を描くことは、私の密かな楽しみになった。考えてみれば選択科目は美術にすれば良かったのだ。そうすれば授業で絵をかけたし、後に1927（昭和二）年に建てられた木造二階建ての校舎が解体されたさい、その土台の木材を使って美術部の生徒を中心に、美術科を選択していた生徒たちとで、さまざま木彫作品を作って旧校舎の記念として残す作業にも関わられたのに。これは後の祭りであった。

私ที่บ้านに帰って音楽部弦楽合奏班というものに入って、ヴァイオリンを弾くことになったと話す父は、それからしばらくしてスズキ製のヴァイオリンを一セット買ってきてくれた。裕福とは言えない家計の状況を知っていたので驚いたが、

学校備え付けの楽器は数が少ないので、自分の楽器を持てたことは、いつでも練習できることなので嬉しかった。

この時わたしと同時に弦楽合奏班に入った新入生はたくさんいた。その中で、子供の時からヴァイオリンを習ってきたのは一名だけ。あとの九人はまったくの素人。この素人たちが、第一ヴァイオリン・第二ヴァイオリン・ビオラ・チェロの各楽器に数人ずつ分かれ、それぞれ先輩たちから教えを受けながら、放課後毎日音楽室と音楽準備室に通い、それぞれの楽器の稽古に明け暮れる毎日となる。第一ヴァイオリンには三人、第二ヴァイオリンには私も含めて三人、ビオラが二人、チェロが二人。二年生はF先輩を含めて数名しかいなかった。これで立派な弦楽合奏班が出現するわけだ。

そしてそれぞれの楽器をなんとか一応演奏できるようになった夏ごろからは、弦楽合奏班のテーマ曲である、モーツァルトのアイネ・クライネ・ナハトムジークの練習に入った。日本語に訳せば「小夜曲」。とても美しい曲で、月夜の気持ちの良い夜の窓辺に佇む恋人に向けて、男がその恋心を歌い上げるという曲想の曲だ。そしてこの曲がなんとか弾けるようになるとその後は、もう一つのテーマ曲、NHKの大河ドラマ赤穂浪士のテーマ曲に入る。これは三年生のI先輩がテレビのテーマ曲を聴いて、その中のオーケストラの全奏の部分を除いて、弦楽合奏だけのところを採譜して作った譜であった。

だんだん弾けるようになると私たちは、次に主に、バロッ

ク音楽の名曲に挑んで行こうと考えた。ここは弦楽合奏曲の宝庫だからだ。

特に私たちが二年生に進級して部活の中心となった翌年には、新入生にとってもヴァイオリンの上手い女子学生が入部してきた。Iさんだ。

小柄で可愛いIさんと私はなぜか気があって、たしかこの翌年三年の夏の部活合宿の時であった。毎年富士五湖の本栖湖畔で行われる合宿。この合宿の間中、いつも二人で一緒にいた。湖畔で風景をスケッチしたり、ハイキングで行ったパノラマ台という岡の頂上から風景をスケッチしたり、夜には湖畔の砂地に毛布を引いて、二人並んで寝ころんで、深夜遅くまで星と流れ星を眺めたり。こんな思い出が残っている。彼女も私と同様に、絵を描くことが好きなのだ。きつとこの共通点のせいだろう。気があったのは。私は彼女のことを好きだったが、彼女にとっては気の合う先輩の一人だったと思う。だからこれ以上は何もない。残っているのは展望台で二人並んで写生をしているところを誰かに撮られた写真が一枚だけ。後で述べる卒業後の弦楽合奏班にも彼女は一緒にいたが、この会が途中消滅してからはずっと会っていない。学校で弦楽合奏をしている間だけの関係ではあった。

また横道に逸れた。話を元に戻すと、小柄な彼女はとてもヴァイオリンが上手いのだが、あまりに手が小さすぎて、大人用のヴァイオリンでは充分に指が届かず、そのためにプロのヴァイオリニストになるのを諦めたという人だった。それ

でも彼女はおもいっきり小さな手の指を伸ばして、かなり大胆に力強く演奏する。格好のソリストを得た私たち二年生は、喜び勇んで、バロックの名曲、それも独奏ヴァイオリンと弦楽合奏のための名曲に次々と挑戦していった。そして二年生の同じく子供の時からヴァイオリンをやってきた彼を加えれば、二台の独奏ヴァイオリンと弦楽合奏のための協奏曲ですら演奏できるのだ。それにこの年の新入生も数が多く、Iさん以外にももう一人子供の時からヴァイオリンをやってきた女子学生がおり、第一ヴァイオリンが三人、第二ヴァイオリンが二人。これで二十人近い大きな編成の弦楽合奏団になった。

弦楽合奏班のリーダーとなったN君を中心に私たちが最初に挑んだのは、ヴィヴァルディの「四季」。これは一台の独奏ヴァイオリンと弦楽合奏のための四曲からなる協奏曲集。その中の「秋」を選んだ。三楽章制。次にはコレッリのクリスマス協奏曲。正式名称は、合奏協奏曲第八番ト短調。六楽章からなる美しい曲。これも途中何箇所か、独奏ヴァイオリン二台が入って来る合奏曲だ。総譜を銀座の山野楽器まで出掛けて手に入れ、どのように曲を解釈して演奏するかを考えるために、たくさんの異なる演奏団体のレコードを購入してきて、これを放送室に籠って聴きまくる。そうして一番心に響いた演奏を見つけると、それをひたすらまねる。こうやって次々と難曲に挑戦していき、神奈川県下の高等学校の弦楽合奏部のコンクールにも挑んでいった。

挑んでみてわかったことだが、他の学校の部はみな、初心者むけの簡単な曲だけ。我が部のように、バロックの名曲ばかりを揃えて挑んでくる部は一つもない。それもそのはず、他校は皆、音楽の教師が顧問として部を統率していて、指導も曲を決めるのも顧問だったからだ。我が県立川崎高校音楽部の顧問は本来であれば、川高の名物音楽教師灰野先生であったが、先生は音楽部の活動には全く手を出さず、音楽の授業に来て、その合間に音楽室でヨガをしているだけで、終わると準備室で囲碁好きの仲間と碁を打って、それから陶芸をやっている丹沢の自宅に帰っていかれる。このため音楽部の顧問をしていたのは英語科の曾原先生。通称怪獣ゾバラ。先生は音楽に詳しくないからまったく音楽部の活動には口を出さない。引率が必要な時しか活動には顔をださない。だから合唱班も弦楽合奏班も、どちらもリーダーが中心になって指導し演奏する曲も決める。だから弦楽器を習い始めてわずか一年にしかならない者が大多数を占めるのに、いきなりクラシックの名曲、それもかなりな難曲に取り組むわけだ。だから曲の途中で、各パートがずれてくることはしばしばあった。コンクールの演奏中でもそうなのだ。必死で、我が部では指揮者もたてないので、第一ヴァイオリンのトップN君の指示でなんとかまとめようとする。こんなアクロバット演奏を一年間やっていた。

弦楽合奏班には音楽気違いも多数いた。暇さえあれば音楽準備室に籠って練習する。授業中にこれをやるから、教室に

ヴァイオリンやチェロの音が聞こえると冷や冷やした。

中でも熱心なのはチェロのO君。彼は暇さえあればチェロを弾いていた。なんと授業が自習になればすぐ音楽準備室でチェロを弾く。それだけではなく授業をサボってまでしてチェロを弾く。その彼のチェロの音が授業中の教室に響いてくる。彼はチェロを弾くだけではなくリコーダーも演奏する。彼のチェロの袋のポケットには、このリコーダーと数学の参考書が入っている。そんな恰好で彼は毎日登下校し、休日には、プロのチェロ奏者に習いに行っていた。そして高校卒業後はアマチュア管弦楽団に入り、理工系の大学の数学科を卒業してからは高等学校の教師となり、今度はなんとそこで吹奏楽を教えていた。後に私が中学教師となって赴任したあと、近くにあった高校の教師となっていた彼に再会し、びっくりしたものである。

川高での弦楽合奏の日々は、土日も長期休みもなく、毎日二年間続いた。そして三年になって大学受験のために部活を引退してからも、弦楽合奏班の三年生は毎日のように音楽部の部室に入り浸り、後輩に交じって演奏していたものだ。そしてそれぞれが高校を卒業して大学に入ったり浪人したりした翌年、今度は現役の三年生と卒業生で弦楽合奏団を組み、続けて行くこととした。練習場所は、私の家の近所の御寺が経営している幼稚園の施設。この活動は約一年続いたが、それぞれが大学でそれぞれ異なる部活動に入ったり、大学での活動が忙しくなる中で、自然解消されていった。

このOBの弦楽合奏団が、これから三十年以上経って再結成されたら、一年後輩で近所に住むI君から聞いたのは十年ほど前であっただろうか。メンバーの一人が長野の高原地帯の白馬でペンションをやっているの、一年に一度そこにあつまって練習すること。I君は高校時代にはヴァイオリンだったが、このごろはチェロを習っているとのこと。先輩もやりませんかと誘われたが、すでに平家琵琶を習っていたので、ここに集中したいからの理由で断った。納戸の奥で埃をかぶっているヴァイオリンに日の目を見させ、Iさんにも再会できるチャンスではあったのだが。

しかし高校の三年間と、その翌年の浪人生となった一年間。本当に毎日が音楽漬けであった。

振り返ってみると県立川崎高等学校は音楽活動の盛んな学校であった。音楽関係の部活としては、音楽部（合唱班と弦楽合奏班とからなる）があり、それからクラシックを中心とした吹奏楽を行う吹奏楽部。このほかにはジャズを中心とした軽音楽部があり、部活ではないが、文化祭を中心として臨時に結成されるグループサウンズのバンドが幾つかあった。このメンバーには、音楽部や吹奏楽部や軽音楽部の音楽関係の部活の者や、普段は運動部で活動している者から構成されていた。そういえば当時巷で盛んであったグループサウンズのバンドの一つのワイルドワンズのメンバーの一人は川高の卒業生であった。

同世代の仲間の多くは、この当時流行っていたビートルズ

やベンチャーズなどに代表されるロックに染まっていて、この流れでロックバンドを組んだり、グループサウンズのバンドを組んでいたのだ。しかし私は中学時代からクラシック音楽漬け。まったくロックにもグループサウンズにも興味はなく、続いて盛んになっていったフォークソングにもほとんど興味はなかった。またこれらの音楽は同時期に盛んになっていったベトナム反戦運動や学生運動の隆盛と一対になっていたのだが、そして川高は、神奈川県下でも学生運動の盛んな学校の一つで多くの学生活動家がいた。そして彼らを中心として学校は組織されていたので、学校の横を走る国鉄南武線の支線である浜川崎線を、米軍基地に送るジェット燃料が輸送されていることにたいする反対運動が組織されてもいたのだが、これにもさしたる関心は示さなかった。一対の物となっていた反戦運動・学生運動とロックなどの音楽活動。このどちらにも距離を置いて見ていたというのが実情である。

もともと学外の活動には参加しなかったが、学内で行われる活動、文化祭でのクラス参加や体育祭での仮装行列などには参加せざるを得ず、ここからは大きな影響は受けていたのだ。一年時の文化祭クラス参加は、アメリカナイズされた日本というテーマで、自分たちの日常生活が如何にアメリカ化されているのか調べて展示した。二年時のクラスは政治的テーマから逃げてお化け屋敷になったのだが、三年時には模擬裁判を行い、テーマは、太平洋戦争で戦死した英霊が高度成長の豊かな安逸な生活にふける小市民を裁くというものだった。

た。そして三年時の体育祭の仮装行列は、ちょうど小学校の社会科教科書に神話が復活したことに抗議して、巨大なヤマタノオロチを作って、これをスサノオノミコトが退治している真つ最中にデモ隊が乱入して両者を破壊するという激しいものであった。さらに三年時に生徒会が提起した、制帽廃止の運動。こうした正規の活動には真剣に参加したので、あとから考えてみればとても深く思想的な影響を受けたのだが、これらと対になっていったロックなどの音楽活動にはまったく関心を示さなかったことは、私が如何にクラシック音楽に没頭していたかと言う事を示す好例である。

#### さらなる音楽との出会い―中学教師となつて

大学では私はどの部活にも入らなかった。1969（昭和四四）年4月に一浪してから入学した国学院大学には弦楽合奏部もオーケストラもなかったし、大学は学問をする所だと考えていた私には、最初から部活動に入る気はなかったのだ。もともともう一つ合格していた中央大学に入学していれば、そこにはオーケストラがあったので、入学していた可能性はある。しかし自分のヴァイオリンの腕の低さを自覚していたので、かなりの手慣れが集まる大学オーケストラには入らなかっただろう。とにかく私の大学四年間は、歴史研究（一年次はシルクロードを通じた東西文化交流史、二年次以降は、世界の革命史と近代史を詳しく研究、四年次は古代日朝関係

史)とマルクス主義研究に浸る四年間で、音楽漬けから一転して、今度は図書館に籠る毎日であった。

ただし大学生になってから私は、渋谷のヤマハ楽器で木製の外国製のアルトリコーダーを一本手に入れ、わざわざ特注品のケースまで作って、教則本からリコーダー独奏曲集を手に入れて、一人リコーダー演奏に凝っていた。そして同じくヤマハ楽器で、小遣いで好きなレコードを購入していた。大学受験に失敗して浪人生となった時、なんと父にねだって、大学入学祝いの前払いと称して、ステレオを買って替えてもらっていたのだ。あとは渋谷の東急文化会館の一階に、音楽喫茶のリトル・プレイハウスという素敵な店があったので、しばしばつまらない講義をサボってここに通い、好きな曲のレコードをリクエストして、音楽に浸ることがあった。この時期に良く聴き、レコードも購入した曲は、高校時代の続きでバロック音楽であったと思う。

そしてこのリコーダーとの出会いが、さらなる音楽との出会いに繋がっていったのだ。

それは1974(昭和四九)年4月に、就職浪人をしてからようやく採用された川崎市立柿生中学校に赴任して、ずいぶん経ってからであった。というのもも教師になった年に弟に誘われて政治活動に入り、昼間は教育活動、夜と休日は政治活動と言う忙しい二重生活になっていたので、何年もの間音楽からは遠ざかっていたからだ。

最初の年と二年目には、クラシックギターを買ってきて、

通信講座にも入って教則本と教則レコードで練習していたのだが、弦を爪弾くために爪を伸ばしている事を、当時の養護教諭に咎められた。「生徒を叩いた時に怪我させるよ」と。もともと私は生徒を叩くことなどしない主義だから問題はないのであるが、何かの拍子で怪我をさせる可能性もあると考えギターの練習は辞めた。もともと教育活動と政治活動で忙殺されていたから、どんどん練習どころではなくなっていたのが実情であった。

このため、せつかくのヴァイオリンもリコーダーもクラシックギターも埃を被り、ステレオも埃を被る状態になっていた。

しかし途中からこの状態に変化が起きた。1978(昭和五三)年の春、一人の若い音楽教師が赴任してきたことだ。Tさん。私より三才年下。彼は大学在学中からリード合奏の指導者として各地の高校などで教えた経験を持ち、一方で趣味としてリコーダーを演奏する人であった。年も近かったし、彼は音楽と共にとても歴史に関心の深い人であったので、何年か一緒に学年を組んだり、私は当時生徒会指導担当や学年委員会指導担当をしていたので、音楽科が担当し指導もする合唱コンクールも彼と一緒に企画立案指導することとなって、さらに文化祭の企画担当ともなって、行事の立て方動かし方などを議論するようになる。二人は自然と意気投合し、彼と二人で放課後になるとリコーダーを演奏したり、音楽や歴史談義をする日々が始まったのである。

私が教師になって三年目の1976（昭和五一）年には、柿生中学校の合唱コンクールは、自由曲に合唱曲以外の曲も採用できるように規則を改定していたのだが、彼の前任者のベテランの音楽教師はこれに難色を示していたが、Tさんは気軽に生徒が選んだ映画音楽や歌謡曲でもどんだん合唱用に編曲してくれ、生徒たちの合唱熱を盛り上げてくれたものだ。

そしてさらに、1981（昭和五六）年の文化祭からは、文化祭に後夜祭を入れたいと生徒の要望が出てきて、生徒会と職員会議で議論したうえで、代わりに文化祭の最後に「交友祭」というものを入れ、皆で歌を歌ったりダンスをしたりするようになった。そしてこの翌年、1982（昭和五七）年には、文化祭に個人参加やグループ参加を許可し、許可する条件として生徒会と教員によるオーディションを設けることとなった。このため校内にいくつもの合唱団やフォークグループも出来てきて、こうした音楽グループの指導も、Tさんは喜んで引き受けてくれた。そしてこの動きはさらに広がり、グループ参加が増えたお陰で、体育館での一度の公演だけでは参加団体が入りきれない状態が生まれた。こうした動きを背景に、1984（昭和五九）年には、生徒会の提案で、土日の文化祭の二日間は、生徒はどこにいても自由であるという文化祭に結実する。普通の学校では文化祭は一日で、午前と午後とにわけて、学年毎に行動して、展示の部と演技の部を見るという形になっているのだが、柿生中学校では、これを二日間自由とし、二日間ずっと演技していてもよいし、

ずっと自分の展示室にいてもよいし、さらにPTA主催の食堂のウェイター・ウェイトレスとして仕事をしても良いという形にしたのだ。もちろん二日間好きなどころを見学するだけでも良いし、さらに運営スタッフに立候補し、二日間裏手で支えても良いとしたのだ。こうした動きにもTさんは積極的に関わってくれた。この年の生徒のグループの中には、ロックバンドも含まれ、見事オーディションに合格して、文化祭当日演奏を果たした。

この動きは最初、生徒会役員選挙に、三年生が大挙して集団を組み、統一選挙公約を掲げて立候補した所から始まった。スローガンは、「OPEN・ザ・文化祭」。この動きに並行してPTAからは柿生フェスティバルを始め、文化祭一日フェスティバル一日にして、PTAや同窓会や地域の人も文化祭に参加させよとの動きが起きた。この二つの提案を受けて、職員の文化祭企画委員会が、すべてを合体した形を提案し実施したのだ。PTAも同窓会も地域の人も、それぞれグループ参加団体を作って文化祭に加わる形だ。

注・柿生中学校の文化祭が、1981（昭和五六）年からほとんど自由な形に変化したのは、教師や生徒の動きもあつたが、この動きを積極的に受け入れ、学校を今までとは違ったものにすることを支えてくれた校長の存在がある。この年の秋に赴任されたA校長である。当時少々荒れていたこの学校をどう立て直すか。この問題をA校長は、合唱がかなり盛ん



だったことに着目して音楽だと考え、翌年から二年間、市の音楽の委嘱研究校とすることで、この動きを加速した。当時私および組合分会の多数派は、生徒中心の学校にするには行事を生徒中心に変えることからだと考えていたので、校長の動きと相まって、音楽も行事も盛んになったのだ。

当時の彼は、かなり自由な発想の教師で、1982（昭和五七）年2月に、横浜市で日雇い労働からもあぶれて路上生活となっていた労働者が、夜の公園で中学生に殺される事件が起きた際には、この出来事の新聞記事を使って道徳の授業を行うなど、差別問題にも関心の深い教師であった。ちなみにこの事件には日雇い労働運動をやっていた弟も関わり、彼は仲間と共に、横浜市の中学校を幾つも尋ね、路上生活者への差別をなくすための授業をやってくれと要請行動を起こし、これを阻止しようとした中学校が警察に通報し、要請行動を行った者たちを逮捕させるといふ暴挙まで起きた事件である。またTさんは、自分が不得意である合唱の指導力を付けるために、夜や休日に、合唱指導の上手い人を訪ねて教えを受けるなど、本当に熱心に音楽教育に励む人でもあった。

だから私も考え方が近くて、その上に、彼も歴史が好きだと言う条件も兼ね備えていたので、二人はどんどん意気投合して行ったのだ。

ただ二人で放課後にリコーダーを演奏したり、音楽歴史談義をやったり、文化祭や合唱コンクールの在り方をどうする

かをめぐって、勤務終了後に同じ考えの同僚たちと、車でレストランなどに出掛けて食事しながら討論したりしたのは、1981（昭和五六）年2月以後のことであつたと思う。

ちよつどのころは、私が政治運動や労働運動の在り方に疑問を覚えて活動を控え始めた時期であり、さらに、この年の卒業式の君が代日の丸問題をめぐって職員会議が紛糾し、そこで君が代日の丸反対派が、「日本人なのになぜ反対するのか」「君が代を歌い日の丸を掲げることと、日本が軍国主義になつていくこととは別だ」「みんなオリンピックなどでは日の丸を掲げ君が代を歌う。なぜ学校ではいけないのか」という強烈な反対派への反撃を行った一人の若い女教師Dさんの発言に粉碎された。この結果、柿生中学分会としてこの政治的な問題は棚上げにして各自対応とし、以後は教育活動に専念すると決めた時だ。

そして、大学受験を失敗した年に父にねだつて新たに手に入れていたステレオを買い替え、さらに大型の高級なDENON製のステレオに変えたのは、Tさんの影響を受けて、クラシック音楽でもさらに、宗教音楽や弦楽四重奏、さらには様々な作曲家の交響曲や交響詩に関心を深め、わざわざ秋葉原の石丸電気まで出掛けて、数少なくなつた日本製のLPレコードや、外国製のLPレコードを買い漁つていたこの時期であつた、ステレオシステムの保証書に記された購入年月日は、昭和六十一年十二月二十八日。1986年の暮れである。これはT氏との出会いから、八年ほどたった後のこと。彼の

影響で様々なジャンルのクラシック音楽に没頭した果ての事であったと思う。

この時期に私が関心を持ったのは、まずは交響曲。ベートーベンの交響曲から始まり、さまざまな作曲家の作品を聴きまくった。中でも深い感銘を受けて全集を購入したのは、マラーの曲。ヨーロツパの後期ロマン派の巨匠で、とても甘美なメロディで彩られた、それでいてオーケストラの深い響きが豊かな、宗教的な雰囲気も湛えた曲群である。これとともに同じく深い感銘を受けてレコードを集めたのが、中学生の時にそのレコードを偶然二枚手に入れて好きになっていった、北欧の作曲家シベリウス。彼の交響曲や交響詩も民族色豊かで、その上歴史性も強くかつ神秘的な響きに満ちた曲であった。中でも彼のあまり知られない傑作、クレルボ交響曲。これは彼の初期の作品でまだ民族色が曲想には出てきていない時期のものだが、フィンランドの英雄詩カレワラの中に出てくる英雄の一人クレルボを主人公とした物語を交響作品で描こうとした交響詩に近い作品である。メロディも響きもかなり幻想的。これはシベリウスの後期の作品で、民族色豊かな交響詩タピオラと対になる作品である。これら後期ロマン派と民族派（国民楽派と呼ばれる）の音楽に触れる過程で、それぞれの民族の英雄詩に興味を持ち、カレワラやドイツの英雄詩ラインの歌や、イギリスの英雄詩であるアーサー王伝説も、翻訳書であるが購入して読みふけたものである。これは音楽に並行して、自分の歴史に対する興味が古代史に集中

していた時期で、日本の神話や伝説にも興味を持って研究していた時期に照応する。これが後に昭和天皇の病氣と崩御に伴う騒動に触発されて、天皇制とは何かと研究し、その過程で王の物語としての平家物語を語る平家琵琶に出会うことに繋がる伏線であったと思う。

交響曲ではさらにメンデルスゾーン。そしてこのことから彼のもう一つの得意ジャンルである宗教音楽にも没頭するようになり、ここからバロック以前の西欧の宗教音楽から始まり、バッハやモーツアルトに、そしてベルディやフォーレなど後期ロマン派のそれに至るまで、数々の宗教音楽の名曲を集めて行くことにも繋がる。そして合奏の音の響きに注目していたので、その最もシンプルな形態としての弦楽合奏と弦楽四重奏に関心が行くことは必然である。弦楽合奏曲は高校時代から関心のある分野だったが、これに加えてこの時期には弦楽四重奏に興味に移り、ハイドン・モーツアルト・ベートーベン、そしてシューベルトにメンデルスゾーン。さらにフランクやラドボルザークにバルトーク、そして現代音楽の祖源に位置するベルクなど、さまざまな弦楽四重奏曲を集めまくった。

宗教音楽や世俗音楽でも宗教的な響きを持った音楽に対する関心が深まった背景には、大学生の時に宗教に関心を抱いたことに始まる。

国学院大学は国家神道の中樞を担った神社本庁が設立した大学である。そのため文学部には神道学科があるだけではな

く、学生は神道学入門を履修することが必須となっていた。

私が神道学入門の講義を受けたのは、宗教社会学者の西田長男氏である。西田氏の講義で印象に残ったことが二つある。

一つは、「国家神道は神道ではなくて天皇教という近代天皇制国家日本を作るために形成されたものだ」「本来の神道は、八百万の神々に典型的に示されるように、最も古い宗教の形態である人間の力を越えた存在である自然そのものを神としたものだ」という宗教の定義。もう一つは、宗教も含めた人間の思想の力が社会を変え歴史を作ってきたことを明らかにした宗教社会学者として、マックス・ウェーバーを挙げたことだ。このため私は入学してすぐに、ウェーバーの著作を何冊も読んだ。そして大学時代に一番興味を持ったのが、革命史を中心とした宗教からの自立を図った近代という時代の歴史と、日本の古代の在り方が、近代日本になってからどう認識されたのかというテーマだったため、歴史を学ぶ上に宗教は不可欠の要素だったからだ。

この大学時代の研究テーマは教員になってからも続けているので、宗教への関心は持続し、特に政治活動を一時離れた1984（昭和五九）年以後は、キリスト教の旧約・旧約続編・新約聖書を読みふけったり、コーランや仏典を読みふけり、宗教社会学の研究書を読みふけた。歴史上で不変であるかのように考えられてきた宗教も、実は歴史の中で激しく変化してきたし、教祖の教えすら改変された歴史があることが分かってきた。これが西洋音楽の中でも宗教音楽に関心が

集中して行った一つの背景であったと思う。それになんといつても宗教音楽は美しい。世俗音楽の比ではないのである。

さらにT氏の影響の中で出会った音楽として重要なのは、1964（昭和三九）年に結成された日本音楽集団を中心として、現代音楽のリズムや音の強弱などを前提として、日本の伝統音楽を、現代的に革新していこうとする動きがあるとTさんから紹介され、この集団のLPを多数購入して聴き入ったことだった。彼らの曲を聴く中で初めて、箏や尺八や琵琶や他の雅楽の楽器などの日本の楽器の音とも出会ったのである。それもとても現代的なリズムと強力な音とともに。私を知っていた邦楽とは、まったく異なる印象を与え、西洋音楽との出会いにも通じる強烈なものであった。そして日本音楽集団を作った作曲家三木稔の作品や、彼が日本音楽集団の主席箏奏者であった野坂恵子と共に開発した20弦箏のための音楽など、多数の現代邦楽の曲に浸った。

しかしこの人々の音楽を聴くにつけ、なぜ伝統の革新なのか。伝統のまま維持することも大事なのではないかとの疑問もわいてきた。なぜなら彼らの音楽は、基本的に西洋音楽の理論、それも20世紀の現代音楽の理論によって作られており、あくまで西洋音楽がベースで、使用している楽器が日本のもので、音楽で表現している題材が日本のものであるに過ぎないからだ。日本の音楽にも独自の音楽理論があるはずである。私の乏しい知識では、日本の音楽と西洋の音楽とは音階が違うことぐらいしか知らなかったのだが、聴き比べ

てみれば、大きく異なることぐらいはわかる。この日本音楽に固有の理論に従って、和楽器のための現代的な音楽ができないのだろうか。こういう疑問なのである。

これは後に平家琵琶に出会ってから知ったことなのだが、平家琵琶を駆使してきた当道座の琵琶法師たちも、ただ単に伝統を墨守してきたわけではない。彼らは平家物語を語るのと並行して、やがて浄瑠璃姫物語という別の恋物語に平家琵琶の背景にある音楽理論を駆使してこれに節をつけ、平家琵琶で音を取りながら語る芸を始めた。そしてこれがおいおいに人々に受け入れられるとともに、一方でとても人気のあつた、傀儡子（くぐつ）の操る人形芝居と結びつき、ここに人形浄瑠璃が生まれて行つた。そして浄瑠璃が大人気となるに従い、大勢の人が集まる小屋で上演するようになる、音量が小さく、多彩な音色を出すことのできない平家琵琶では物足りなくなつたのであろう。室町時代の後期に琉球から伝来した蛇皮線を改造してより大きな音の出る三味線を作りだし、これを蛇皮線のように爪弾くのではなく、平家琵琶で使用してきた撥で弾くように改めた。このため人形浄瑠璃は次第に三味線をバックにした語りで行うようになり、その後人気のある浄瑠璃を、今度は人間が演じて興行することが歌舞伎の世界で行われていった。こうして三味線で語る浄瑠璃節が新たに生まれ、音量も音色も多彩な三味線による音楽が、平家琵琶にとって代わつた。そしてこの浄瑠璃節から様々な三味線音楽が生まれ、勇壮な義太夫節や、逆に三味線を爪弾くこ

とで情感豊かに歌い上げる新内節など、さまざまな新たな音楽ジャンルが生まれて行つたのである。

これなどは伝統音楽が、それ自身の理論に基づくというその根幹は変えないが、それ自身の現代的発展によつて、自己革新を遂げて行つた好例であろう。

こういうことが現代における日本の古典音楽でもできないのだろうか。古典音楽そのままを大事にするとともに、それに基づいて新たに現代的な曲を作る。これで良いのではないか。日本音楽集団やこれを率いた三木稔などの音楽は、あまりに西洋音楽の現代版に価値を置き、それに日本音楽を融合させようとする試みではないのか。私の疑問はこういうことだつたのだと思う。ここに後に日本の古典音楽の根幹ともいえる平家琵琶に出会う伏線の一つがあつたように思う。

また日本音楽集団に出会つた同じ時期に、私のクラシック音楽涉猟の旅は、次第に現代音楽に到達していた。それは、後期ロマン派の音楽から、その中から生まれた、国民楽派と呼ばれる、それぞれの作曲家が自分の民族の歴史と伝統を見直す中で生まれた音楽へ。これは中学の時にあつたシベリウスなどの音楽である。そしてまた同時に、後期ロマン派の音楽の中から、次第に西洋音楽の伝統的理論から脱却しようとする傾向、すなわち従来の調性や和音や音楽形式を否定し、もつと伝統から自由な音楽を志向する新しい傾向の音楽への関心であつた。

しかしここでも私は疑問を持った。これらの新しい音楽は、

なぜ美しくないのであるかと。これらは、調性や和音を否定した。これは、音楽の根幹と私が考える、音の響きの美しさや旋律の美しさを破壊し、それは私の耳には、雑音とさえ聞こえるものになっていったからである。私が許容できるのは、現代音楽の先駆けの人たちの音楽まで。十二音階をつくったシェーンベルグやベルクなどはまだ、音の響きの美しさや、旋律の美しさまでは否定していなかったからだ。

私は音楽とは、元々神にささげるものだったと考えている。神の恩寵に感謝し、さらなる恩寵を願う儀式で使用されるもの。したがってそれは神を讃え、神に捧げるものであり、人はそれを美しく飾った。なぜなら人が神に祈る時は、しばしば深刻な災害に出会ってそこから回復を祈る時であったり、次の収穫への期待や、病気からの平癒だったりする。これは人間を越える大きな力の前では無力な傷つきやすい存在である人間が、生きていくための心の柱として神を創造し、その神に祈ると同時に自らも癒されたいとするときである。だから音楽は世界共通に、音の響きの美しさと旋律の美しさを根幹に持っている。こう考えるのである。ちなみに私は客観的存在としての神を信じない。神は神を信じる人の心の中にのみ存在する。人が神に祈るのは、人の弱さを克服し、災害や苦難に傷ついた自らの心を癒すためである。だから自らが神に抱かれたように感じる、異次元の世界に分け入ったかのよう感じるために、日常とは異なる空間の創造と、美しい天上の音楽が必要なのだと思う。

この音楽の根幹を否定してしまうと、それはすでに音楽ではなく、ただの耳障りな雑音。これこそが芸術であると言われてしまえばそれまでなのだが、芸術とは、そうした訳も分からないものであるのか。

現代では美しい旋律や音の響きを基本とする音楽は、大衆音楽と言われる分野のものか、映画音楽と言われる、映画などの映像作品に使われる音楽しかない。芸術と言われる現代音楽は、人々の心を震わせ感動させるものではない。これこそ芸術だ、これが分からないのかと強弁する、音楽批評家や作曲家を信奉するマニアだけが、分かったつもりになっていると、私には思えるのである。

そしてさらに同じことは、現代の絵画や文学においてもいえることである。

現代絵画は抽象画オンパレードである。何を描いたのかわからない絵。絵を見た人が自由に感じてくれればそれでよいと画家は言い、絵に題すらつけない場合が多い。絵画というのは本来、自己主張するものではないか。自分が感じたことを人に伝えるものである。それなしに、見た人の自由な受け取り方で良いとは。私は抽象絵画には感動しない。カンディンスキーやピカソやミロなどの初期の抽象絵画を除いて。そして本来の絵もまた神に祈るためのもので、生き物の姿や風景を美しく描くものであった。長い間絵を描くことを認めなかった父親にやっと認められて絵の勉強に励んだのに、当時抽象絵画や象徴派の絵画が幅を利かせていたウィーン的美術

学校でその美しい風景画を、「そんなものは芸術ではない」と酷評されて自信を失い、やがて反知識人反左翼の極端な民族主義者になっていった、アドルフ・ヒトラーも、きっと私が現代絵画に感じたのと同じことを感じたのであろうと思う。

注・ナチス総統アドルフ・ヒトラーの歪んだ性格が親の虐待によつて生まれたことは、アリス・ミラー著『沈黙の壁を打ち砕くー子どもの魂を殺さないために』(1994年新曜社刊)に詳しい。

さらにこれは文学でもそうだ。特に日本の文学。純文学・大衆文学という区分自体がおかしい。文学で哲学をするのが純文学みたいな言説が支配的であるが、哲学は哲学でやれ。人を感動させるのが文学だろう。感動にも様々なものがあるが、人の心を動かさない文学は文学ではないと思う。

いやこれは、音楽や絵画や文学だけではなく、すべての芸術芸能分野にいえることである。現代のそれは、一方で精神の高尚さのみを追求して大衆を感動させることを軽視し、一方で伝統を嫌うあまりに、その全否定に走っていると私には見える。そしてここには、伝統を全て否定し、社会の革新を急進的に迫及する、マルクス主義の姿と合わせ鏡のように良く似た姿を見るのは、私の僻目であろうか。左翼である私が言うのもなんであるが、どうも右翼・民族主義者の感覚に通底するものが、私の感覚には存在する。西洋近代が否定し去

った中世や古代にこそ、それぞれの民族が長い歴史の中で培ってきた、人間文化の華が存在するのではないかという感覚が。

またまた横道に逸れてしまったが、柿生中学での後半の七年間は、本当に音楽漬けであったと思う。Tさんとリコーダー合奏をするだけではない。新たにヤマハ製の黒檀で出来たアルトとソプラノのリコーダー二本を買いそろえて演奏していたし、最後には教育課程内のクラブ活動でリコーダークラブを立ち上げ、生徒たちとも合奏を楽しんだ。さらに合唱が盛んになってくると、私も生徒と一緒に合唱を楽しみ、PTAのコーラスにも駆り出され、一緒に合唱を楽しんだ。

しかし1988(昭和六三)年春に西高津中学校に転勤してしばらくの間は、音楽とはほとんど無縁な生活になってしまった。なぜならばこの学校は当時、市内随一の荒れた中学校だったからだ。

原因は生徒たちにはない。荒れた原因は、教師の暴力である。何かと言うと難癖をつけて生徒に暴力を振り、暴力で生徒を支配しようとする教師が多数そこにはいた。そしてその中の数人の教師が他校へ転任すると、教師と生徒との力関係に変化が生じ、長年鬱屈した生徒の不満が爆発するのである。

なぜこの学校は荒れているのか。その原因を探るのに二年かかった。そしてこれを変えるための仲間を見出し、暴力教師が居づらくなるような、生徒中心の明るい学校にするためには、さらに六年はかかった。

そして最初の四年ほどはこの学校には、音楽を一緒に楽しんでくれる教師はいなかった。ということとは、生徒と音楽を楽しむ教師もいなかったということだ。音楽だけではない。多くの教科で、その教科の学びの楽しさを生徒に伝えている教師は、ほんの少数派だったのだ。その少数派を結合し、さらに毎年転任してきたり新卒で採用されたりした教師の中から、生徒と楽しめる教師を見つけ出して、この人たちと結びつく。この取り組みの中で再び、音楽や美術や体育や理科や、それぞれの教科や様々な行事を、生徒や仲間の教師とともに楽しみ、楽しい学校を作っていく教師集団が出来ていく過程でまた、私が音楽に浸ることのできる環境が生まれたのである。転勤して何年か経ち、暴力教師の大部分が転勤して学校が落ち着いてくるとともに、この学校でも合唱が盛んになり、生徒と合唱を楽しんだり、PTAのコーラスにもまた参加するようになった。しかしリーダーと一緒に楽しめる人はおらず、楽器はそのまま埃を被ったままに。

そして家でも、この時期は私の政治運動や労働運動のありかたへの疑問を共有できる仲間を見出した関係で、マルクス主義の全面見直しの総括作業に没頭していたし、歴史研究では、昭和天皇の病氣と崩御に伴う騒動をきっかけとして、それまで研究してきた古代史と中世史の知識を背景にして、天皇制とは何かという問題の研究にも没頭していた。このため家でもレコードを聴くこともなく、これもまた埃を被ったままになっていた。

最もこの時期は家ではなく、職場で音楽を楽しんでいた。西高津中学校十五年間の後半七年間は、私は図書館担当となった。司書教諭の資格も取り、一日中図書館に入り浸りとなっていた。各クラス二名以上という、ある意味で破天荒な規定を生徒会規則に挿入させたお陰で、八十名近い図書委員が集まった。この生徒の力をフルに使って、毎月一度は一万冊ほどある図書の台帳との照らし合わせの作業を行い、図書委員の中のボランティアの力で、始業前や昼休み、そして放課後や長期休業中の図書館開館を実現した。このため本を静かに読める環境を作る一環として、ミニコンポを図書館に入れ、いつも音楽を、それもクラシックを中心に流していた。そこで私は、放課後や長期休業中は図書館に籠り、ここで毎時間の社会科授業の指導案や資料やノートを作ったり、図書館日より、新規購入の図書の整理や図書の修理などの仕事をしていた。この際に、バックグラウンドミュージックとして、好きな音楽を毎日流していたのだ。

また、この時期は、音楽以外の芸術にも再び関わるようになっていた。

1991（平成三）年秋に鎌倉遠足を実施し遠足ノートを生徒たちと作った際に、私は仲間の教員と、鎌倉の美術館巡りをした。そして見て来た美術展について詳しい感想を「遠足ノート」として作った関係で、以後は、年に三十回ほど、あちこちの美術展に顔を出し、家に戻るとその感想文を書きつける毎日となり、これは2000年頃まで続いた。そして

これは柿生中学の最後の三年間で既に始まっていたことなのだが、花の写真を撮ることが、私の生活の大きな部分を占めるようになっていて、2000（平成一二）年からは、自分で撮影した花の写真の展覧会を、毎年開催するようになった。この時期の政治活動は、理論的総括作業が大部分であったので、夜や休日の多くは自分の時間であった。だから教育活動のあとの残った時間は、研究活動に費やすとともに、趣味の時間として使うことも可能になったのだ。だがそれでも音楽を演奏することへは、私の心は戻っていなかった。

### 平家琵琶との出会い

私の心を再び音楽に戻したのは、平家琵琶との出会いである。2001（平成一三）年4月。私は初めて平家琵琶を聴いた。所沢市内の宝玉院。新井先生のご自宅である。語られた句は何であったのか。その次の6月の回以後は録音機で先生の語りを録音してあるが、6月が「文覚被流」と「伊豆院宣」なので、その前の4月は「勸進帳」だろう。「読物」という特殊な語りの句。かなり感動し、演奏会終了後の茶話会で、中学校を退職したら入門すると話した記憶がある。当時はまだ具体的にいつと決めていたわけではないが、定年まで勤める気はさらさらなかったもので、五十一歳となっていたこの時にはすでに、あと五・六年かなと思っていたところだ。

この演奏会は、新井先生の平家琵琶と、御夫君の新井弘順

さんによる声明からなっているもので、ここで初めて声明と言う、日本古来の仏教音楽にも初めて出会ったのだ。そして当日の説明の中にもあったとは思いますが、平家琵琶の音楽は、声明の音楽理論で成り立っており、声明の中に講式という物語を語るものがあるが、平家琵琶はその講式と瓜二つであり、新井弘順さんによれば、平家琵琶は平家物語と言う物語を語る講式と考えると良く理解できるといいます。両者の違いは、声明には音程をとる楽器はなく、途中で何度も語りの節が変わって（西洋音楽的に言う）と変調されて使用する音階が変わる）音程が変化するのだが、その際にも、最初に一度だけ鳴らした鈴の音を頼りにしてずっと頭の中で音をとって語る。一方平家琵琶は琵琶と言う楽器を持って語るので、途中で語りの節が変わって音階が変化する際には、これからの節で使用する音階を琵琶で奏で、その音を頼りに語っていくことが出来る。ある意味で声明の講式と平家琵琶とは、ここだけが違うと言っても良いということであった。

声明の音の響きも平家琵琶の音の響きも、どちらも奥の深い心に滲みるものであり、心地よいものであった。

これから二年間、2003（平成一五）年3月末に退職するまでは、新井先生の演奏会だけではなく、新井先生の師匠の橋本敏江先生の演奏会にも通い、さらに宝玉院で定期的に行われる勉強会、本来は相伝者を育てるために設けられた日本伝統音楽研究所の講座で、日本音楽について深く勉強するために、それぞれの専門家を講師として学ぶ講座に通った。



この中から初年度には、「平曲」（平家琵琶は江戸時代に、平家物語と区別する意味でこう呼ばれた）と「日本文化史再考」の講座を受講し、たしか月に一度であったと思うが、平日の夜所沢の宝玉院まで通った。さらに二年目には、これに「声明」の講座と「グレゴリオ聖歌」の講座を加えた。

しかし、2001（平成一三）年9月11日のニューヨークでのテロをきっかけとして、このままでは世界はとんでもないところに行ってしまうと言う危機感が私の属する政治グループの中に生まれ、新たな時代に対応するためには、マルクス主義と左翼運動の総括を速やかに終え、新しい運動のための社会変革の理論を構築しなければいけないとの強い思いが出来て来た。この中で理論的総括の中心にいた私に対して、早急に教員を退職して、理論的総括活動に専念して欲しいとの要請が出て来た。

要請の背景とその意味は理解した。私の認識では、アメリカのブッシュ政権は、キリスト教原理主義とでも言うべき思想運動とトロツキストから転向して右翼に走り、アメリカ的民主主義で世界を再組織しようとする、いわゆるネオ・コンとが支配する政権である。そしてこの政権が生まれたのは、戦後発展し続けた資本主義世界経済が成長するために必要な収奪可能な地域がなくなり、世界を暴力的に再組織することで、収奪可能な場を拡大しようとする運動の産物だと理解していた。したがってこれは世界的に激しい反発を生み、その一つがイスラム原理主義運動の勃興とアメリカに対するテロ

だと理解した。なんと時代は、一気に第一次世界大戦前の状況に逆戻りし、世界的に民族紛争が激発するが、これに代わる新しい世界像が存在しないままでは、紛争はそのまま世界の破局に繋がりがかねない。早く新しい世界像を作る必要があるので、その作業に没頭せよとの要請と理解した。

だが、今すぐの退職は無理である。ちょうど新たに加わった学年で、三年間を見通したカリキュラムを組んで環境教育を主軸にした教育活動を展開し始めていたところである。その二年目に突入していた。これを途中で放棄するわけにはいかないので、このプログラムが終了し、生徒が卒業する2003（平成一五）年3月まで待つてもらうことにし、以後は理論的総括作業と教育活動の二足のわらじを履くこととした。

それに学校で私を中心になって進めて来たことは環境教育だけではなかった。西高津中学でも学校が落ち着くにつれて文化活動が盛んになり、ここでも柿生中学校と同じく、二日間自由な文化祭が1996（平成八）年から始まっていた。だが職員間に反対意見も強く、これを根付かせ、中心になって担う人を育てないで私が退職すれば、この試みはすぐさま頓挫する。これに図書館活動の後継者育成がある。こうして2001（平成一三）年の秋以降は、自分の仕事をやるだけではなく、後継者育成にも力を注がざるをえなかった。

その上にさらにこのころ、「新しい歴史教科書をつくる会」という、今の極右の安倍政権を形成した勢力の中核を占める団体が作った中学校歴史教科書が初めて検定に合格して、中

学校の授業で実際に使われるようになる可能性が生まれた。しかもこの教科書に対する世間の対応、とりわけ左翼の対応には問題があった。この教科書が、明治時代以後の日本の侵略の歴史を歪め、侵略などなかったという歴史修正主義に立っていることに対する批判はあったが、この会の歴史修正主義はなにも近代以後だけではなく、日本列島に人間が住み始めた時代、つまりは日本民族の形成に関することからすべて、歴史修正主義に立っている事に対しては、ほとんど論究されていなかった。彼らは歴史を科学ではなく、国民の歴史の物語に転換させ、世界に冠たる日本民族の輝かしい歴史という虚構を、学校で教えようとしているのだ。まさに戦前の国史への回帰であり、これは戦後日本のありかたを百八十度転換し、戦前の日本の体制のように、戦争の出来る国に戻そうとの企みの先駆けであると思うのだが、どうもこの点についての左翼の認識は甘いと思えた。

このように認識したのには理由がある。私はこの会の前身である自由主義研究会が1996（平成8）年6月に教科書から従軍慰安婦の記述削除を要求し、さらに翌年この会が、「新しい歴史教科書を作る会」に改組された頃から注目していた。そしてこの会の発展が、世界資本主義経済の成長が止まって市場を失いつつある日本の経済力に陰りが見え、日本が中国や韓国に追いつかれたことを背景として、これを民族の危機と捉え、その活路を、民族主義の発露と中国・韓国などの政治的対抗に求め、日本をそうした国に変えようとする

る運動であると、すでに理解していたからだ。そこで私は自分のサイトにこの教科書の徹底批判を掲載し始め、そのために、再度原始古代の時代から、日本史の学び直しを開始し、歴史教科書批判の執筆にも全力を挙げていたのである。

注：「新しい歴史教科書をつくる会」が出来た背景を、そこに集う自称・普通の市民たちの心性を実証的に分析して、現代日本のナショナリズムの行方を分析した興味深い本がある。小熊英二・上野陽子著『癒し』のナショナリズム―草の根保守運動の実証研究』（2003年5月慶應義塾大学出版会刊）である。

この状態では二足どころか、四足の草鞋を履いた状態である。これでは時々開かれる演奏会に参加することは可能だが、月に何度も夜の講座に出掛けるのは無理である。だからせっかく始めた日本古典音楽に関する勉強に割く時間は次第になくなり、中途挫折せざるを得なかった。

しかしこの多忙な状態も、2003（平成一五）年3月には退職して無事終了。私は目出度く、翌4月に、新井先生に入門。そして2004（平成一六）年の4月には自分の琵琶を作ってもらい、6月20日には、先生の演奏会の前座として初めて人前で平家を語った。初めて語った句は「僧都死去」の一節。謀反の罪で鬼界が島に流され、他の二人が許されたのに一人島に残された俊寛僧都が、彼の身を案じてわざわざ

都から尋ねて来た従者の有王丸から、すでに妻も長男も死に、一人娘が奈良で出家して尼になっている事を聞く。その娘の手紙を読み、都に戻っても家を起こし家族仲睦まじく暮らす夢さえもすでに実現不可能な現実面に直面したことで、娘の身を案じつつも、将来を悲観して干死にの道を選ぶという、平家物語の中でも随一の悲しい物語である。以後、平家琵琶の教習に全力を注ぎ、入門以来十二年経った2015（平成二十七年）の4月までに、先生と相対の稽古はすでに三百十二回。人前での語りの経験も十回を越し、今では平曲全二百句の中でも平物と呼ばれる通常の節回しの句百六十一句の教習は二度目の後半に入り、伝授物というこれが出来れば免許が貰える三十三句の中の「読物」という、最も節回しの難しい句に挑戦する毎日である（これ以外に小秘事・大秘事の五句と八坂流訪月などがあるが）。

もつとも政治活動において、理論的な総括を進め、新たな社会変革のためのプログラムを作ると言うもう一つの作業は進んでいたのだ、二足の草鞋を履く状態は続いている。このため、新井先生に入門した年には、先生と弟子たちとで館山漸之進著『平家音楽史』という平家琵琶の歴史や理論をまとめた書物の読書会も始めたのだが、やはり無理が祟ったのか、途中で頓挫してしまった。その後2009（平成二十一年）年からは曾祖父齋藤修一郎の研究も始まり、歴史教科書の徹底批判の仕事も継続しているので、今でも四足の草鞋を履いた状態は続いている。

ところでなぜ私が、平家琵琶の演奏会に参加することになったのか。このことを語るには、少し前に遡り、私の歴史研究活動に言及せざるをえない。

### 戦に反対する「王の物語」としての平家物語

それは、1989（昭和六四）年1月7日の昭和天皇崩御に前後して起きた、異常とも言える世間の反応に起因する、天皇とは何かということについての歴史研究である。

この騒ぎは、1988（昭和六三）年9月19日に天皇が吐血してから、とくに異常な様相を見せた。歌舞音曲を伴う派手な行事は次々と自粛され、この自粛ムードは、個人の家庭の行事にまで及んだ。そして1月7日の崩御の後はこの自粛は徹底され、テレビ放送からも一時期CM放送が消え、公共広告機構のつくった無味乾燥な定型なCMにとつてかわった。さらに学校における体育祭や文化祭の自粛、地域における様々な祭りやフェスティバルと名付けられた行事の自粛、果ては忘年会から新年会の自粛まで、お祝いと思われぬものや派手なものはずべて社会から消えたのではないかとの様相を呈した。私がいた学校でも崩御の日から六日間の弔旗掲揚が教育委員会から通達されたが、これに対しては、組合が反対の立場を崩さなかったことを盾にとつて、国家元首でもない人のために弔旗を掲げるのはおかしいと職員会議で強く抗議し、弔旗の掲揚は阻止した経験がある。

天皇とは何であろうか。戦前は確かに憲法上の主権者であり国家元首であったが、戦後は一切の政治への介入権を剥奪され、「国民統合の象徴」という、なんともあいまいな地位におかれた天皇。しかし天皇崩御に前後する政府から要請された自粛騒動は、まさに国家元首に対するそれであり、戦後の約五十年にもおよび平和国家への歩みの努力は、ここで無に帰するのではないかとの怖れを、多くの人が抱いたはずである。

私もそうであった。これは勉強してみなくては。ちょうど新しい荒れた学校に転勤し、大変な最中であつたが、これを立て直す取り組みに集中することと並行して、天皇制の歴史研究が私の研究課題の核に据えられたのである。

ちょうどその少し前に、1984（昭和五九）年8月の弟の死を直接のきっかけとして、所属する政治組織の在り方に強い疑問を持ち、その年の12月に組織を離れ、以後約四年間政治活動から離脱した。この時研究した問題は、マルクスの言説が間違つて理解され歪められているとの実感があつたので、思想に比べてより変わらなれないと思われた宗教の研究がこの四年間の中心テーマであつた。そしてこれをやってみて、宗教すら年月を経て変質し、教祖の言説すら曲解されたり歪められることを知つた。この過程で、日本における至高の宗教的存在である天皇とは何かという問題にも、すでに出会つていたのであつた。

日本の歴史を宗教を中心に見直してみると、そこには常に

天皇との関係が問題になつていたことがわかる。特に日本が外圧に直面した時代には、日本が神である天皇を頂点に戴く神国であるという言説が国を支配し、天皇は宗教的存在でもあるということが強調される。その第一は、鎌倉時代のモンゴルの襲来であり、第二が戦国末期における西欧勢力の侵略の危機、そして第三が江戸末期に日本の開国を要求し、アジア各地を次々と植民地と化していた欧米列強の侵略に怯えた時期である。

第一の時には天皇を中心として各地の社寺に外敵退散の加持祈祷がなされ、モンゴル軍を退けることができたのは、神の御加護で大風が吹いてモンゴルの軍船を沈めたからという神話が成立した。日本神国論の成立である。このことを強調した文献としては、後の室町時代の南北朝に南朝を支えた北畠親房の著書『神皇正統記』がある。天皇を神とすることで、対抗する武家勢力打倒の理論的基盤としたのだ。しかしこれに対抗した室町幕府に奉戴された北朝天皇家は、この立場は天皇家そのものを滅亡させる危険なものと捉え、天皇は政治権力に統治の正当性を与える宗教的権威に留まるべきだとの認識を深めていた。

さらに、第二の時には、拡大するキリスト教勢力に対して弾圧を加えた豊臣秀吉によつて、日本は神国だからキリスト教はなじまないとの布告がなされ、最初はバテレン（宣教師）の海外追放から、果ては江戸時代になつてからの信仰そのものの禁止に至つていく。これは、豊臣秀吉も江戸幕府を作つ

た徳川家康もまた、各地に割拠する大名権力を統合するため、自らの政治権力の源泉としての権威を天皇に求めていたことが背景にあった。当時各地にキリシタン大名とされた権力は、自らの統治の宗教的権威としてキリスト教とその頂点であるローマ法王庁を戴いていた。そしてその統治を強化するために、領内の寺社を破壊したり、直接ローマ法王庁に使節を送ったりして、その権威を背景として、生まれいずる統一権力に対抗しようとしていた。しかしこの動きは、ローマ法王庁を権威の背景としたスペインやポルトガルの世界支配に組み込まれ、日本をその植民地にしかねない危険性を秘めていた。これらの国では宗教的権威がそのまま政治権力を有すると言う、いまだに政教一致の状態だったからである。これに対して日本を統一国家にしようとした勢力は織田信長や豊臣秀吉に象徴的なように、仏教勢力を打倒してその政治への介入を排除し、天皇もまた宗教的権威に押し込めることで、日本を政教分離の国家にしようとしていたのだ。この二つの勢力の国内における対抗と世界を植民地としようとする西欧の動きが繋がりを、侵略を防ぐ盾として神国日本という言葉が持ち出されたのだ。

そして第三の時期、西欧列強の侵略の危機に際して、神としての天皇を戴く日本国を守れという言説が湧き上がり、神としての天皇を戴く統一国家を作るための政治思想として発展した国学を背景に、戦争を避けて欧米に学ぶことで対抗できる国家を作ろうと言うとても真つ当な正しい政策をとった

幕府に対する激しい非難が、尊王攘夷派から浴びせられた。この様相はまさに今日、欧米による世界支配に抵抗するイスラム過激派の様相と瓜二つであった。しかし尊王攘夷派が一時西南雄藩を占拠し外国と戦争を始めてしまったが、開国して日本を西洋並みに変革することの必要性を認識していた人々がこの外国との戦争に負けたことを契機にこれらの藩の権力をにぎり、幕府を動かして、彼らも参加できる統一国家へと日本を変える方向に動き、幕府が従わない場合には、天皇を錦の御旗として戴き、倒幕戦争を辞さずとの方向に向かった。この動きに押された幕府の中に、西洋に倣った統一国家建設の必要性を理解した人々がおり、彼らが担いだ將軍徳川慶喜によって突如大政を天皇に奉還することが決定され、実際に日本を統治してきた経験を有する徳川氏を中心として有力諸大名を集めた上院と、その家臣たちでなる下院を設けて、天皇を日本国統合の宗教的権威として奉戴する国家をつくる構想が、多くの有力大名の支持を得た。しかしこれを嫌った薩摩長州二藩が天皇親政の復活を狙う一部の公家勢力と結びついて、徳川慶喜討伐の偽の密勅を出して一気に宮邸クーデタを行い、戦争勃発を予想していなかった幕府を撃破して新政権を作ってしまった。このクーデタがなければ天皇は、日本国統合の宗教的権威に留まり、神として国権の全てを総覧する権力者に祭り上げられることはなかっただろう。

天皇というのは政治権力を握る人というよりも、神に近い存在として永く認識されて来た。そうすると近代の日本にお

いて、天皇が国家元首とされ、さらに憲法上で主権者となつて、国民に諸権利を与える存在とされたことをどう理解するのか。ここが問題になってくる。

明治憲法に示されたように、天皇が国民に諸権利を与えると言う形は、西欧の人権論が天賦人権の形をとっていることに倣って、神である天皇が国民に権利を与えようという形式になっている。なんと近代日本は神権国家の体裁も持っているのだ。これはいったいどういうことか。なぜ明治新政府を握った薩長勢力は神権天皇を必要としたのか。そして、日本の歴史にとつて、日本という国家にとつて、天皇とはどういう存在として歴史的に存在してきたのか。これが私の大いなる疑問として、心の中に膨らんでいった。

さらにこれは、1991（平成三）年の雲仙普賢岳の噴火に伴う火砕流や土石流による災害に際して、そして1995（平成七）年1月の阪神淡路大震災の被害に際して、被災民を見舞った天皇夫妻の姿勢と、それに対する被災者の反応への注目に繋がった。

天皇夫妻はなんと、雲仙普賢岳被災者を見舞う際に、避難所となっていた体育館の床に膝を着き、被災者と同じ高さの目線で、彼らの話を聞き言葉を交わしたのである。そしてこの動きに対する被災者の反応は、政治家の慰問のときの反応とは異なり、心の底からの感謝と安心感に満ちたものであった。これは阪神淡路大震災の時には、さらに強烈であった。

被災者と同じ目線に立って見舞った天皇夫妻。これに対し

て当時首相の座にあった社会党の村山は、にこやかに手を振っては居るが、けっして被災者と同じ高さの目線に立って彼らの話を聞くことはなく、天皇夫妻とは好対照であった。

一方は神、いや正しくは神に仕える人で、国民の安寧を心の底から願う者。他方は為政者であり、国民の生き死にを握る権力者。この性格の違いは一目瞭然であった。戦後の天皇家は意識的に、日本国民の統合の象徴として、その宗教的存在に特化しようと動いていると感じた。

こうして私の天皇研究は、現代史の研究にも繋がっていたのである。

その中で私は、日本の文学の中には「王の物語」と呼ばれる文学作品とも歴史書とも分けがたい作品の系譜があることに気がついた。そしてその最高傑作が平家物語だということに気がついたのだ。「王の物語」とは日本においては、王の統治の正当性を間接的に知らしめる物語である。

この認識は、五味文彦著『平家物語、史と説話』（1987年平凡社刊）という本を読んでいて気がついたことだ。この本では、平家物語が一貫して王家の分裂を背景として描かれているということが指摘されていた。

そう、物語の始まりは、保元平治の乱という、天皇家の分裂に伴っておきた王位継承戦争終結の所から。しかしこの平和はほんの一時期しか続かず、王位についた二条天皇（近衛母美福門院猶子、近衛を継ぐ王とされた）と父で院である後白河（幼い二条の代理で王となった）の対立という形になり、

二条の死によってそれは、後白河の第七皇子を天皇におす勢力と、二条の第一皇子を天皇におす勢力が武力衝突しかねない所まで至った。この対立が回避されたのは、二条の息子を支持する勢力の中核にいた平清盛が、後白河派に鞍替えし、二条の息子をまず即位させ、その皇太子に天皇の伯父にあたる後白河の第七皇子を据えるという形で決着。やがて二条の息子六条は幼くして退位させられ（その後毒殺）、後白河の第七皇子が即位（後の高倉天皇）することで決着を見た。しかしこの平和も長く続かず、成人した高倉と父の後白河との間で権力争いが始まり、それは高倉を支える平清盛と後白河との戦いとなっていった。

この相次ぐ王家の分裂が、平家物語の背景としてであると、この本は指摘していた。

この争いの結果は周知のように、高倉を支える平家が、高倉の第一皇子で清盛の孫である安德を即位させ、高倉―安德という平家の血を引く王朝を樹立することで安定するかに見えた。しかしこれは後白河の第二皇子で、かつて王家主流であった白河―鳥羽―近衛と続く王朝の中心であった美福門院の猶子となっており、八条院（近衛妹）の庇護の下でこの王朝の次の天皇として期待されていた以仁王の叛乱と、彼の平家打倒の令旨が全国の源氏に広がり各地で反乱が相次いだことで崩れた。そしてこの源氏の勢力に後白河が支持を与え、平家の血をひかない高倉の第四皇子を皇位につけた（後鳥羽天皇）ことで、結果として平家と平家王朝は滅びたのである。

この歴史を描いた物語が平家物語なのだが、では物語はこの歴史をどう描き、どうまとめているのかが気になって、初めて覚一本平家物語を精読してみた。

読んでみてびっくりした。平家物語と題されているが、この物語の隠れた主人公は後白河なのだ。物語の前半は、後白河を奉戴する勢力と高倉を支える平家の争いとして描かれる。そして後半は、蜂起した源氏が都に迫る中で、高倉死後の王家の一人である後白河に逃げられ、その権力の背景を失った平家が西海に逃れ、果ては壇ノ浦に沈むことで争いは決着する。そしてこれは平家の血を引く男子を全て殺すことに繋がり、平家嫡流の六代御前の死を持って、平家は滅びる。

しかしこの後半の物語を読んでいて気がついたのは、物語の通奏低音として、平家の公達が発する、「あれほど王家に尽くしたのになぜ裏切られ追討されるのか」という恨み節が流れていたことだった。そういえば物語の始まりは、まさに平家に支えられて後白河の王家が成立したのだった。なのにこの後白河に裏切られた。これが物語後半の骨格である。

注…通奏低音とは、バロック音楽特有のもの。チェロやコントラバスやビオラと言う低音の楽器群が、ヴァイオリンの奏でる華やかな旋律の陰で、その旋律の根幹の音階を、静かに旋律を支えるように流れている。ここから、表面には出てこないが、物事の根幹・主題を陰で示していることとして通奏低音という言葉が使われる。

そして興味深いことは、年代記的にいえば、六代御前の処刑の方が最後に来るのに、この話の後に、つまり平家の完全滅亡を見届けた後で時間を巻き戻し、物語の主人公である後白河が、出家して大原に隠棲していた清盛の娘で安徳の母である建礼門院を訪ねる場面が置かれている。そして後白河はなんと建礼門院に対して、自らの決断によって門院の一族である平家を滅ぼしてしまったことを詫び、宮廷に戻って来るようにと懇願した。ここには明示されていないが、まだ三十代の若い門院を、後白河の妻の一人として迎え入れることで、自らが滅ぼした平家の血統を、後白河王家の中に取り込むことで、後白河の権力の安定を図ろうとしたものであろう。そしてこれに対する建礼門院の答えは、生きながら仏法で言う六道の世界を全て見てしまった私は、現世に戻って榮耀榮華を送る気はない。ここで静かに一門と我が子の菩提を弔うと、後白河の求婚をはねつけたのであった。

物語として見事な構成である。

物語の最後に隠れた主役が登場し、物語の表の主役であった平家を代表する建礼門院に詫びると言う形で、王家は武家の支え失くしてその地位に留まられず、武家は王家の支持なくしてその権力を維持できないと言う、この物語の真の通奏低音・主題が提示されているのである。

このことから私は、平家物語の成立の謎をこう捉えた。この物語の主題は、「王家は武家の支え失くしてその地位に

留まれず、武家は王家の支持なくしてその権力を維持できない」というテーゼを示すことにある。そして全体を仏教説話の体裁を保ちながら、戦の悲惨さ悲しさを強調し、戦を回避することの賢明さを説いているのだと。

こう考えたわけは、主として、先に見た物語の構成と通奏低音としての平家の公達のつづやきと後白河の大原の発言であるが、これ以外に、この物語の随所で、武家が武家であることの悲しさが語られているからである。たとえば「鶴」の章で、鶴と言う化け物を退治したことをほめられた源頼政が、天皇に「なぜそなたほどの弓の手慣れが三本の矢をもっているのか」と聞かれた際に、「武家は王家に仇なすものを討つために命をかけている。しかし鶴ごとき化け物を討つために駆り出され、しかも一の矢で逃せば私の名誉は傷つけられ、それは自害して濯がねばならぬほどのもの。だから一の矢で外した場合は二の矢で鶴を退治し、三の矢で、私をくだらない仕事に駆り出した者を打ち取るつもりだった」と語った。ここは武家の悲しさを語るとともに、物語の通奏低音そのものが顔を出した部分である。もう一つあげれば、「那須与一」の章で、彼が扇の的を射ることを命じられ、乗馬を汀に乗り入れている狙った際に神に祈って、「西国くんだりまで戦に駆り出され、その上扇の的を射させられるというくだらない仕事に駆り出された。それでも的を射落とせなければ名誉は傷つけられる。もし外れたならば直ちに自害して海に沈み竜神となり、平家も源氏も王家も呪って、皆を海の底に沈めてやる」



と、つぶやき、こんなことをさせないために、神よあの扇の的を射させ給えと祈る。

ここも戦を仕事とする武士の悲しさを描いたものだ。

そして平家物語の合戦場面は勇壮なものとはほとんどなく、有名な武者の最期と戦のあとの茫洋とした虚しさを多く描いている。軍記物で勇壮な合戦を描いたものとよく誤解される平家物語だが、これはそうではなく、王家分裂の争いに翻弄された人々の悲しい人生を描いた物語なのである。

注：平家物語が軍記物とされ、日本の英雄詩だとされたのは、明治時代に西洋文化受容の中で、日本には西洋文学の華である英雄詩がないことが問題となり、これに対して、平家物語には木曾最期など合戦で死ぬ英雄の最期が豊かに語られていると指摘されたことに始まる。この認識が、日清日露戦争を経て日本が忠君愛国を国是とする国となっていく中で強化された誤解だと最近明らかにされている。大津雄一著『平家物語』の再誕―創られた国民叙事詩』（2013年NHK出版刊）を参照のこと。

ではこの物語はなぜ作られたのか。

これはこの物語の最後で、後白河が平家の建礼門院に侘び、彼女を妻として迎え入れようとしたことに示されるように、西海に沈んだ平家の魂を鎮めることをまず表面的な目的としていると思われる。そしてこの物語が王家と武家の密接な関

係を語っており、しかも戦の悲惨さを説いていることが、この物語成立の背景を推察させる。

王家と武家との密接さを説いた歴史文書として、天台座主を務めた慈円の『愚管抄』が知られている。この書物は、鎌倉幕府を討伐し、再び王家の世の中をつくろうと画策する後鳥羽上皇に対して、これを断念せよと説いたものと伝えられている。とすれば同じ主題で成り立っている平家物語は、慈円の説得にもかかわらず幕府打倒へと踏み込み、敗れて後鳥羽上皇が隠岐の島に流されたあとで書かれたものである。

この事情を示している史料が、吉田兼好の『徒然草』の第二百二十六段の章段である。後鳥羽上皇の御ときに、慈鎮和尚が、信濃の前司藤原行長に物語を書かせ、生仏という盲目の琵琶法師に語らせたとの記述である。

慈鎮和尚とは、慈円の諡号（おくりな）である。彼は天台座主を五度も務め、平家滅亡の後都を襲った大地震が人々によつて平家の怨霊のなせる技だとされたとき、怨霊を鎮めることを目的に大饑法院という寺院を、1204（元久元）年に比叡山に作り、日夜加持祈禱を行わせて怨霊を鎮めたという。この年は平家の壇ノ浦での滅亡から約二十年後。そして平家嫡流の六代御前が、文覚上人の謀反で庇護者を失い処刑されてから約六年後。そしてこれは後鳥羽上皇による院政開始後六年で、すでに將軍実朝を朝廷内部に取り込み幕府権力打倒へと向かっていたその時であり、上皇による幕府打倒戦争（承久の乱）開始の十七年前。そして彼は、後鳥羽上皇の

歌の師であり、上皇に大きな影響力を持っていた人物である。

まさに滅び去った平家の諸霊を慰めると言うことを名目しながら、かの王家分裂による源平の争乱を回顧し、再び騒乱が起らないことを願っての動きであったであろう。慈円のこの動きの中で『愚管抄』がまず書かれて後鳥羽に献呈され、この建策が拒否されて後鳥羽の挙兵と島流しという結末を見た後、王家や武家に対して、歴史の教訓を忘るべからずとの戒めを込めて、王家と武家との関係を情感豊かに語った物語として出来たのが、平家物語ではなかったか。

私は平家物語をこうとらえた。そしてこの仮説を確かめるべく、平家物語諸本を比較検討した。延慶本平家物語。四部合戦本平家物語。源平闘擾録。源平盛衰記。これらは含まれる話の多寡が異なり、さらに一つ一つの説話の内容も異なるのだが、さきに見た覚一本平家物語の体裁と物語の骨格、そして通奏低音は同じであった。そしてこうした理解を提示した学者はまだいなかった。

そこで私はこれを論文にしようと尽力した。その最中に、兵藤裕己の『平家物語―（語り）のテクスト』（1998年ちくま新書）が出され、私のアイデアの多くがこの書の第一部「歴史の構想」において、明確に提示されていることに気がついた。本当にがっかりした。

二年近く没頭したテーマであっただけ、しばらくは研究に手がつかなかった。1998（平成一〇）年のことである。しかし翌年、ついにパソコンを仕事で使うようになり、2

000（平成一二）年にはインターネットも使うようになった。その中でふと、平家物語はそもそも琵琶を伴奏にして語られたものだったことに改めて気がついた。兵藤の本もその後半は、語りが如何にして成立したかの彼の仮説であった。

そこで今でも平家物語を琵琶で語る人はいないのかと思いついて、インターネット検索を行ったのだ。そこに平家琵琶奏者として新井泰子先生がおり、所沢の御寺で定期的に演奏会を開いているという情報が目に飛び込んできた。

こうして2001（平成一三）年4月。私は初めて平家琵琶の演奏に出会い、即座にその魅力に引き込まれてしまった。

そして平家琵琶を習い、その歴史に触れるに従い、兵藤が提示した語りの成立史は根本的に間違っていることに気がついた。兵藤は平家物語の成立過程を、現代に残っている琵琶盲僧の語りの成立過程になぞらえて捉え、平家物語の祖本は慈円の元で出来た短い物語であったが、その後各地にいた琵琶盲僧が個々に源平の戦いの記憶を語っていたのが、後の時代になってこれに統合され、さらに洗練化されたと考えた。

しかし平家琵琶を習ってみると、これはかなり複雑な音楽理論を背景に持っている。そしてその語りの詞章は、漢籍に対する詳しい知識がなければ書けない内容を多々含み、宮内での政治闘争の実態や人々の心の中まで知らずして書けないものも多く、さらに実際の戦闘を知らずには書けない箇所も多い。そして全体は見事に王家と武家との関係を説く主題に沿って統一されている。

こうしてみれば平家物語は、『徒然草』が証言するように、その詞章は都の貴族たちが作り、それに声明の音楽理論に基づいた節をつけて、これを生仏という琵琶盲僧に語らせたという理解の方が正しいと思う。むしろ最初の平家物語は今の「覚一本平家」よりもずっと長い、「長門本」とか「延慶本」とかの長い物語であったが、語りの中で洗練されて短くなった。一方で東国武士の活躍などを詳しく長い物語にさらに追加した長い諸本、例えば「源平盛衰記」や「四部合戦状本」なども現れ、今日に見られるように多数の異本が残ったのだろう。そしてこの生仏はいまだ正体不明の人物だが、平家物語の成立以前から、西国の九州と中国四国地方の西部に琵琶を手にして様々な経と物語を語る琵琶盲僧がいたことがわかるので、この流れに属する人物ではなかったか。そして琵琶盲僧を束ねる寺院が比叡山延暦寺になったことで、ここが琵琶盲僧の拠点の一つになり、そこで活動した人物だったのではないか。当道座の史料では彼は藤原氏の出だとされている。平家物語を王の物語と理解すれば、語りの成立もこう理解される。

私は平家物語を、本来は、王家と貴族社会に対しては、彼らは実際に社会を統治している武家の支えなくして存在しえないことを説き、武家に対しては、彼らの統治は、王家と貴族の権威の支えなくしてあり得ないことを説き、双方の対立が戦争に至らないようにすることを目的に作られたものだと考えている。この意味でこの物語は、「反戦」の物語である。

自らの皇統を守るために戦を起こしてしまったことを悔い、建礼門院に詫びる後白河法皇の姿にここが凝縮されており、さらにこの姿は、後醍醐天皇に対抗し武家政権を維持しようとした足利尊氏に後醍醐天皇家臣新田義貞追討の院宣を出してしまったことで数十年に渡る内乱を起こしてしまったことを悔い、内乱が一時平和となったときには自ら出家し、たった一人の弟子を供として、戦乱の戦跡を辿り、死者の霊を弔った光厳上皇の姿に重なる。光厳が尊氏に院宣を授けたのは、後醍醐のやり方では天皇家そのものが滅亡すると考えたからだ。この上皇の子孫である北朝天皇家と北朝の本来の嫡流である伏見宮家が特に平家琵琶を好んだことは、光厳上皇の悔いと、後白河法皇の悔いが合わせ鏡のようだったからだろう。そしてこのことは現代において、極右安倍政権によって日本が再び戦争に巻き込まれる危険が増大する中で、これに対抗するように先の大戦の戦跡を巡り死者を慰霊するとともに、過去の歴史をしっかりと踏まえることの大事さを機会あるごとに強調する今上天皇夫妻の姿に重なっていく。

注：光厳上皇の生涯とその心性については、岩佐美代子著『光厳院御集全注釈』（風間書房2000年11月刊）が詳しい。

したがってこの物語は、源氏物語が色恋を主題としているために平和な時代に好まれるのに対して、戦争の時代、戦争の余韻がまだ残っている時代にこそ好まれるものだと考えて

いる。平家琵琶が大変流行したのが、南北朝期から戦国期であることはこのことを示している。そして続く江戸時代初期にもこの流れは続いた。平家物語が初めて本として流布したのがこの時代である。そして平家琵琶は明治末に消えかかったが、これが昭和前期に文庫本となると、さらに一世を風靡した。そして先の大戦後、この物語は様々に現代語訳が作られ、さらに平家物語を題材にした大河小説が書かれたのもこの時代である。平家物語や平家琵琶が栄えたのはすべて戦乱の時代かその余韻が強く流れる時代であった。

今また時代は移り、再び戦争の影が見え隠れしている。こんな時代だからこそ平家物語はもっと読まれるだろうし、平家琵琶も聴かれるようになるに違いない。

私が初めて平家琵琶を聞いてこれに魅了されてしまったのは、この物語及び音楽が、戦を嫌い平和を祈ると言う、まさに宗教音楽の色彩を帯びていたからだと思う。

### 我が家と音楽

最後に、こうして私にとって音楽が不可欠の要素になっていった背景に、我が家と我が家の歴史があったことを記して、この文章を終えることとしたい。

最近まで、正確には2005（平成一七）年2月の父の死と、2009（平成二一）年2月からの先祖たちについての歴史研究を始めるまでは、私と音楽とがこれほど密接な関係

を持っていないことと、私の父母および先祖たちとは、ほとんど関係がないと考えていた。しかし父の死で、父方の親族と直接関係を持つようになってから、そして2009（平成二一）年以後、母方の先祖たちについて調べ始めて、この考えは間違いであったことに気がついた。

私のこれまでの考えの根拠は、私が中学時代に音楽、それも西洋のクラシック音楽と劇的な出会いを果たすまで、我が家で音楽を聴いたことがほとんど記憶にないからであった。ラジオやテレビでもクラシックや邦楽の放送を聴いたり見たりした記憶はない。家にレコードもプレーヤーもなかった。だから私と音楽が密接な関係になったことは、私一人に起きたことだと思ひ込んでいた。

しかし我が家の歴史を紐解いて見るとそれは間違いであり、これが分かって来ると、私の記憶の底に沈んでいた、我が家と音楽の記憶が呼び覚まされて来たのである。

弟と妹が小学校に通っている時代（つまり私の中学高校時代）に母は、PTAの役員をやり、近所の同じ住宅（みな同じ電機メーカーの社員からなる住宅）の同年輩の子供を持つ母親たちと、コーラスグループを作って楽しんでた。そしてこの会はやがて、長尾地域の全体にわたる婦人グループへと発展し、この会は毎月何かしらの学習会を開催したり、あちこちの山や名所周辺をハイキングしたり、さらに老人ホームなどを慰問したりと、活発な活動を行っていた。この頃である、母は、母の姉の家で不要となったアップライトピアノ

を譲り受け、妹にピアノを習わしていた。妹が習いたいと言ったからではあるが。

聞いて見ると母は、子供のころから様々な音楽を聴いてきたようである。

母の一番上の姉は音楽ではないが日本画を習っていた。また次の姉はヴァイオリンと油絵を習っていたし、母のすぐ上の姉と母も子供のころは三味線を習っていた。そして母は子供のころは二十歳年上の姉夫婦に連れられてよく、劇場や音楽会や映画館に行ったのだそう。さらに母の上の兄はクラシック音楽がとて好きで、小遣いをためてはSPレコードを買い集めていたし、クリスマスプレゼントと言えば、レコードをお願いしていたという。2010（平成二二）年に京都の母の実家を訪問した際に、従妹から聞いた話では、伯父が残した数百枚におよぶレコードとCDが今でも残っているそう。そして多数の総譜も。そういえば我が家では、私がクラシック音楽を聴くようになって、日曜夜のNHKの教育テレビのNHK交響楽団の演奏を放送する番組（N響アワー）を良く聴くようになった。今ではクラシック音楽館と名前が変わっているが、毎週この番組を聴いているとき、母は指で調子を取っている。兄たちが聴いているレコードをいつも横で聴いていたそう。さらに、母の上の兄の娘である従妹は音大のピアノ科を出てアメリカに留学して、プロのピアニストを目指した人でもある。また母の上の姉でヴァイオリンを習っていた人の息子の一人は、音大を出てプロの作曲家をや

っている。そして母の下の姉の娘は油絵の修復家である。

ただ母方の祖父母がどの程度音楽や芸術の素養があったかはわからない。祖父松本均は化学者ではあるが、趣味の一つに絵を描くことがあったことは分かっており、母の実家に祖父が模写した鳥獣戯画が残っている。また同じく母の実家に残る、祖父が大学を定年退官したさいに、先輩や友人からもらった餞別の手紙や書や、さらに俳句を扇面に描いたものなどを張り付けた屏風があるのだが、その中に祖母松本利が詠んだ俳句も入っていた。

また母方の祖父の兄・松本源太郎の妻は、東京音楽学校でヴァイオリンと声楽を習って演奏していた人で、日本におけるヴァイオリニストの草分けの一人である。先生は外国人の男性で求婚されて困って、1891（明治二四）年7月に卒業して東京音楽学校に就職が決まっていたがすぐに京都の府立高等女学校の音楽教師となって先生の元から逃げたそう。名前は松本愛（愛子と通称）。結婚前の名は岩原愛。彼女のヴァイオリンの先生は、ルドルフ・ディートリヒ。ピアノの先生は、メーソン。ピアノの助教としてメーソンを助けたのは、日本人初の女子留学生としてアメリカに渡ってピアノを学んできた永井繁子、結婚後は瓜生繁子となったその人である。そして繁子の夫となった瓜生外吉は海軍軍人で、彼もまたアメリカの海軍士官学校に留学した人で後に海軍大将となった人物。彼は松本愛の従兄であったので、両家はずっと親しく交わり、源太郎の子供や孫たちはしばしば小田原の瓜生家を

訪問したそうだが。しかし瓜生家での会話は、繁子が日本語を  
わずかしかできなかったので全て英語で苦労したという。し  
たがって源太郎の日記によると、夫婦はしばしばクラシック  
音楽の演奏会に出掛けていた。このためであろう、愛と源太  
郎の長男の娘の一人は音大を出てピアニストとなり、その夫  
もまたチェリストである。

注…東京音楽学校時代の岩原愛については、愛の子息松本秀  
彦が書いた『母を語る』（1977年私家版）が詳しいが、坂  
本麻実子著「石川県人の西洋音楽事始め」（お茶の水音楽論  
集4・日本をめぐる論考 徳丸吉彦先生古稀記念論文集 2  
006年刊）に簡潔にまとめられている。

また面白いことではあるが、松本源太郎の日記を読んでい  
て、彼が平家琵琶を聴いていたことがわかった。1898（明  
治三一）年6月18日のこと。彼が属する武生郷友会という  
故郷出身の人々の互助会があり、この会の仲間で平家琵琶を  
聴いた。日記には「五時、栗塚・旧君・渡辺悌夫婦・勝田夫  
婦・土肥を連れて至り共に飲む。平家琵琶を聴く」（原文は漢  
文）とある。会は毎月会所で会合を開いて、講演会を行った  
り様々な芸術鑑賞をしたりしていたのだが、その中の一環な  
のか個人的なものなのか不明だが、主だった会員と平家琵琶  
を聴く会を設けていた。場所は不明。栗塚は、栗塚省吾で大  
審院判事。旧君は旧越前府中の領主で郷友会会頭の本多副元

男爵。渡辺悌は、当時明治天皇の侍医を務めていた渡辺悌二  
郎。勝田は不明。そして土肥は、東京帝国大学医科大学の皮  
膚科梅毒科教授の土肥慶蔵。松本源太郎は第一高等学校教授  
である。共に飲むとあるから、どこかの料亭であろうか。当  
時の会所は副会頭の齋藤修一郎の青山高樹町の自宅である。  
百人は収容できる大邸宅である。

注…館山漸之進の『平家音楽史』（明治四十三年刊・芸林舎昭  
和四十九年再刊）に多数明治時代の平家琵琶演奏会記録が見  
られる。それによると、この明治三十一年六月十八日の数日  
前六月十二日に、日本橋倶楽部で平家琵琶演奏会が行われて  
いた。演奏者は、伊豆島検校・合田春悦・深川照阿・桜痴居  
士。この会の評判を聞きつけて会員の誰かが聴きたいと言  
出したのだろうか。この平家琵琶演奏会で平家を語った人物  
に東京在住の元儒者の大槻如電と千葉在住の元当道座琵琶法  
師の瀧口城濱を加えると、当時東京で平家を語れる人の全て  
である。伊豆島は江戸最後の検校。合田も元当道座の琵琶法  
師。深川は幕臣だが平家琵琶の達人。桜痴は、元幕臣で外交  
官・日日新聞社社長であった福地源一郎。この中から武生郷  
友会会員と縁のある人は、福地源一郎（桜痴）である。福地  
は元外交官で岩倉遣欧使節団の一等書記官であったが、同じ  
くこの使節団の一等書記官に、十八日の会に参加した渡辺悌  
二郎の兄の洪基がいた。そして福地は渋沢栄一との縁も深く、  
彼の紹介で大蔵省に勤めたり、渋沢と共に東京商工会議所も

設立しており、伊藤博文や井上馨との関係も深い。武生郷友会副会頭の齋藤修一郎は、この渋沢や井上との関係が深く、この当時中外商業新報社（後の日本経済新聞）の主筆兼社長だが、この会社を作ったのは三井財閥の大番頭で井上馨の腹心でもある三井物産社長である益田孝である。益田は元大蔵省官僚で福地とは同輩。そして益田の三井物産には、松本源太郎の妻愛の兄である岩原謙三がいた（後会長）。そしてこの時の会から二年前、明治二十九年の秋に、政治家の大岡育造の別邸での紅葉を見る会で招かれた客の中に益田孝と福地があり、他には大倉喜八郎・馬越恭平・高梨哲四郎・益田克徳ら、財界の重鎮が揃っていた。そこで福地は「木曾最期」を語っているが、参加者は何時も聴かされているようで迷惑げであった。この逸話は、石川半山の『烏飛兔走録』に書かれたもので、森銑三の『明治人物閑話』に再録された話である。この参加者の何れとも齋藤は懇意であるが、とりわけ会主の大岡と齋藤修一郎は、二年後に齋藤が帝国党を作る際に、山口県を基盤として県政を握っていた大岡一統が帝国党の一方の旗頭として期待されていた。こうした関係から、武生郷友会会員が集った平曲会で平家を語ったのは、福地源一郎であった可能性が高い。それにこの場合は酒席であるから、元琵琶法師らは出席しないであろう。酒席でも気軽に語るのは福地である。ということは、松本源太郎が聞いたのは、彼の十八番の「木曾最期」か「那須与一」であったろうか。

彼らが先祖代々仕えて来た越前府中本多家の江戸屋敷は本所にあり、江戸時代初期の隣家が、かの有名な吉良上野介の屋敷。そしてすぐ側の掘割の向こう側には、幕府お抱えの平家琵琶の検校の総録屋敷（一つ目弁天）があり、そこでは毎年平家琵琶の演奏会が開かれていたし、本所周辺には検校たちの屋敷もたくさんあった。検校の一人男谷検校の子孫である御家人勝家（幕末の当主が勝海舟）と旗本男谷家も本所である。当時は一般のものが平家琵琶を聴く機会はほとんどなく、将軍家や大名家の法要や、彼らや旗本や豪商が主催する茶会ぐらい。一つ目弁天での琵琶会は一般人が平家琵琶を聴く貴重な機会でも、福地源一郎も長崎から江戸に来て、ここで平家琵琶を聴いて学びたいと思い、後に明治になって元当道座の琵琶法師の原口喜運から学んだ。この一つ目弁天近くには屋敷があつた越前府中本多家の侍たちも、江戸に来た折には平家琵琶を聴いていた可能性はある。不思議な因縁である。

この松本家の先祖がどの程度音楽や芸術と関係があつたかは分からない。ただ祖父松本均とその兄源太郎の父晩翠は、絵を描くことが趣味の一つであつたと伝えられている。

母方の祖母利の実家の齋藤家はどうかであろうか。

利の父母・齋藤修一郎と喜久子と音楽の関係がどうであつたかはわからない。ただ修一郎は油絵の画家たちが作つた美術会を支える会員になつていたことはわかる。喜久子は江戸の大きな材木商（八丁堀の山田庄兵衛家。明治では工部省御用達）の娘であるから、子供の時から琴や三味線などの芸事

は身につけていたと思われる。したがってその娘である利も、それなりの素養はあったろう。彼女が通った学校は、華族女学校と思われる。利が小学校入学のとき、父修一郎はすでに農商務次官であった。その中等部を卒業したところで松本均と結婚したのだが、明治の欧化主義の中で出来たこの学校では、西洋音楽を教えていたことは確かである。ついでにいうと音楽ではないが、修一郎の父で、越前府中の蘭方眼科医師であった七世齋藤策順は俳諧の師匠でもあった。

そういえば母が小学校を卒業して通ったのは、同志社女学校・高等女学校であった。ここはミッシヨンスクールだから、当然西洋音楽とは深い関係があっただろう。そして母は、五十代で習い始めたことは俳句であったし、六十歳過ぎてから習い始めたことはボタニカルアート、西洋の水彩による植物画である。

母および母の一族が、かなり芸術的環境で育ったことは確かである。

母方は当時としても上層の階層に属していたから、文化的香りがするのは当たり前である。松本家は江戸時代250年間越前府中二万石の小大名家の主席家老の家で、源太郎は東京大学を出て旧制高校の英語・倫理教授であり、最後は学習院の教授で女学部長であった。均も帝国大学を出て、京都帝国大学で化学を教えた。齋藤家はその大名家に仕える、これも江戸時代初期から続く医者の家である。修一郎はアメリカに留学して法学士の資格を取り、外務省・農商務省官僚とな

った。彼らの家は、江戸時代から上層の統治階級であり、それにふさわしい教養を備えていた。

では父方はどうであろうか。

父方は水呑み百姓。水呑み百姓と言っても中には有名な廻船問屋も田畑を持たないがゆえにこれに含まれるのだが、父方の川瀬家は真正正銘の水呑み百姓。わずかばかりの畑を耕して出来た野菜を街道筋に店を出して売り、あとは屋根大工として生計を立てていた。しかし祖父泰重は家を継がず、小学校を出てから商家に奉公に行き、自力で高等小学校卒業の資格を得て台湾に渡って官吏となった。この祖父の趣味は俳句で、師匠となって俳句雑誌を出していた。また父の死後小田原の父の従弟の家を訪ねた際に聞いたことだが、父の一族の中には昔、薩摩琵琶をやっていた人がいたそうだ。家を継いだ四男は明治以後も八百屋として商売を続けたが、その兄弟たちは、祖父が台湾に渡って官吏となった以外は、そのまま故郷に残り、さまざまな商売をやって生計を立てていた。彼らは母方とは違って一介の庶民ではあった。

しかし日本の庶民は、江戸時代からさまざまな教養を持っていたことに特色があった。江戸時代庶民に流行った趣味は、その上層は武家や公家と同じく、和歌や俳句や茶の湯、中には平家琵琶を学んだ者もいた。そして能や絵画や園芸植物の栽培。さらに下層の庶民でも、大店の店員などは、将来店を持つた時のために、能のお謡いを唸るぐらいのことは大概やっていた。そしてそうでない普通の町人や百姓でも、狭い家



の神棚の側に粗末な絵を飾り、家の戸口の外の軒下には、わずかばかりの鉢物の植物を飾ったし、今でも各地の村々に、農村歌舞伎や農村文楽が残っているように、村祭りや町の祭りのお囃子は全部、村や町の住民が担ってきた。そしてこの傾向は明治以後も続いている。日本は他の国では見られないほど文化の香りのする国である。これは他の国とは異なり、250年も戦争の無い平和な国であったことが背景にあるのであるが。こういう国柄を考えてみると、父方もまた多少は音楽や芸術の素養があったのであろう。

父も少し聞いただけで詳しくは知らないが、会社勤めをしている間に、能のお謡いをやっていたそうだ。そして社交ダンスをやっていた関係であろう、父はタンゴやワルツの曲は聴いた。父の遺品としてこの関係の録音テープが多数残っている。

父も母も音楽の素養はあったようである。

しかし私が幼い間は家で音楽を聴いたり奏でたりしたことがないのは、これは我が家が父の稼ぎだけで、三人の子供を養うだけではなく、父の三人の妹や弟の家族の面倒をみなければならなかったもので、家計が苦しかったからであろう。小学校時代は、父の給料日が近づくにつれて、夕食のおかずが一品ずつ減っていったものである。おそらくこうした事情で家に音楽に関するものがなかったのだ。

しかし私がクラシック音楽に興味を持ったのでステレオを購入し、このステレオで、私はクラシック音楽、妹は好きな

流行歌手のレコードを聴いていた。そして妹はピアノを習い、弟はフォークソングに興味を持ったのであろう、高校時代には自分でギターを自作して弾いていた。我が家の暮らしも、私が中学校に入ったところから、少し良くなっていた。父も出世したし、父の妹や弟の面倒を見るのが少しずつ減っていったからである。食事も良くなり、給料日が近づくにつれておかずが減っていくことはなくなった。だから子供の求めに応じて、ステレオを買ったりヴァイオリンを買ったりできたのであろう。そうして父母も次第に、貧しい時には出来なかった音楽や絵画の趣味に手を染めて行ったということだろう。

別にまた書く機会があるだろうが、父はまだ家計が苦しい時代でも母に、子供たちには家計を切り詰めてでも本を買い与えて、読みたいものは何時でも家で読めるようにしなさいと言っていたそうだ。子供たちがねだらなくても、家にはいつもたくさん本があった。ねだればすぐに購入してくれた。本が子供の精神の発達に大きな影響を与えることを知っていたわけだ。母もこの提案を理解できたわけである。母の家もまたたくさん本があったそうだ。そして二人の家にも音楽はあふれていたのであらう。母方は確実にそうだ。だから子供たちが音楽に興味を持ち、欲しいと要求するようになり、家計にも多少の余裕が出て来た時、我が家でも音楽が流れるようになったのであろう。子供というものは、親や親が育った家庭の影響を直接間接に受けているものだと、つくづく思う。

(2015年4月20日、記す)